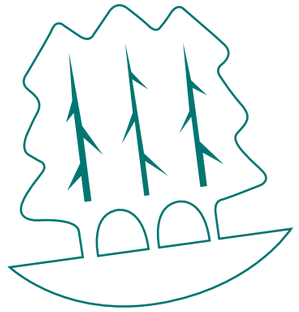
ふくしまから
はじめよう。
Future From Fukushima.

森のはこ舟

アートプロジェクト2015

福島藝術計画 ×Art Support Tohoku-Tokyo

ACTIVITY REPORT　活動報告



主催：福島県｜森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会
実行委員会事務局：特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク
共催：東京都｜アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
協賛：日本たばこ産業株式会社
助成：公益財団法人福武財団 公益財団法人朝日新聞文化財団 公益財団法人野村財団
協力：文化芸術による復興推進コンソーシアム

このプロジェクトは、森林環境税を活用しています。森林をみんなで守り育てよう。

雪だ　光だ
水だ　野火だ
風だ　木だ
鳥のさえずり

ようこそ
母なる
箱舟の港へ
何億もの櫂が
そそり立つ

空と大地へ
会津の森へ

和合亮一

目次 P3
「森のはこ舟アートプロジェクト 2015」年間スケジュール P4 ~ 5
開催概要 P6 ~ 7
組織体制、開催エリア図 P8 ~ 9
インタビュー「プロジェクトの中心メンバーが語る森のはこ舟の理念とこれからの展望」 P10 ~ 15
伊藤達矢×遠藤和輝×川延安直
インタビュー「なぜ、博物館でアートなのか？」 P16 ~ 17
赤坂憲雄×小林めぐみ
福島県立博物館のアート事業の歩みと「森のはこ舟」誕生まで P18 ~ 19
インタビュー「事務局の役割とは、森を見渡すこと」 P20 ~ 21
遠藤和輝
コアプログラム P22 ~ 27
インタビュー「町から森へ向かう独特のスピード感」 P28 ~ 29
五十嵐恵太
喜多方エリア P30 ~ 35
インタビュー「変化のきっかけをつくるということ」 P36 ~ 37
矢部佳宏
西会津エリア P38 ~ 41
インタビュー「アートの通じない町で、アーティストを受け入れる」 P42 ~ 43
三澤真也
三島エリア P44 ~ 47
西会津×三島エリア P48 ~ 49
猪苗代エリア P50
北塩原エリア P51
参考資料 P52 ~ P73

「森のはこ舟アートプロジェクト 2015」記録集

インタビュー：小松理虔、渡部あきこ
執　　筆：小松理虔、渡部あきこ、喜多方 WG、西会津 WG、三島 WG、はじまりの美術館、北塩原村教育委員会、福島県立博物館
編　　集：伊藤達矢、渡部あきこ
デザイン：小堀晴野、矢部佳宏、五十嵐恵太
写真提供：須田健志、佐藤聖太、喜多方 WG、西会津 WG、三島 WG、はじまりの美術館、北塩原村教育委員会、福島県立博物館、
　　実行委員会事務局
発　　行：森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会
発 行 日：2016 年 3 月 31 日

お問い合わせ

福島県耶麻郡西会津町野沢字原町乙 2207-1
090-5357-3381（特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク）
Email：info@morinohakobune.jp

2015

猪苗代　「氷の動物園をつくろう！」ワークショップ
猪苗代　木村崇人トークイベント「地球と遊ぶプロジェクト in 猪苗代」
喜多方　喜多方エリア活動報告展示
三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」展示準備
三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」展示準備
西会津×三島　「幻のレストラン・西方街道〜海と山の結婚式〜」事前準備会
西会津×三島　「幻のレストラン」事前準備会
西会津×三島　「幻のレストラン」事前準備会
三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」筑波大学視察
西会津×三島　「幻のレストラン」ひしお漬け&えごリサーチ
西会津　「森をえがく—植物を介したアート・コミュニケーションの実践—」ワークショップ：西会津こども草木塔コミュニケーションプロジェクト〜みんなの草木塔をつくろう〜
西会津×三島　「幻のレストラン」料理ワークショップ
西会津　「森をえがく—植物を介したアート・コミュニケーションの実践—」成果展：西会津こども草木塔コミュニケーションプロジェクト —草木塔、草木輪、草木子などから森をえがく—
喜多方　「高郷プロジェクト」化石研究会（高郷例会）参加
喜多方　「高郷プロジェクト」高郷町文化祭参加
三島　「地芝居をつくろう・Ⅱ　in 三島町立三島小学校」
西会津×三島　「幻のレストラン」西方街道ウォーキング
北塩原　「森を感じる〜写真家・林明輝が訪ねた日本の森〜」
「森のはこ舟セミナー@三島」
三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」筑波大学視察
三島　「地芝居をつくろう・Ⅱ　in 三島町立三島中学校」
「森のはこ舟セミナー@喜多方」
南相馬現地見学会
「森のはこ舟フォーラム in 南相馬〜つなみがおしえてくれたこと〜」
西会津×三島　「幻のレストラン」大地の芸術祭視察
「森のはこ舟セミナー@西会津」
西会津　「森をえがく—植物を介したアート・コミュニケーションの実践—」自然をつかって描くワークショップ
西会津×三島　「幻のレストラン」キックオフミーティング
西会津×三島　「幻のレストラン」メンバー顔合わせ会
「森のはこ舟フォーラム 2015」

コアプログラム

エリアプログラム

パートナーシッププログラム

2.27 — 2.28　三島　『私たちのハァハァ』映画上映会&脚本家・舘そらみトークイベント
2.21　猪苗代　木村崇人トークイベント「地球と遊ぶプロジェクト in 猪苗代」
2.20〜2.29　喜多方　喜多方エリア活動報告展示
2.20　三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」展示準備
2.8〜2.14　喜多方　「楚々木　冬のワークショップ」
2.6〜2.7　西会津×三島　「幻のレストラン・西方街道〜海と山の結婚式〜」
1.30　西会津×三島　「幻のレストラン」事前準備会
1.29　西会津×三島　「幻のレストラン」事前準備会
1.22〜1.23　西会津　「出ヶ原和紙ワークショップ」
1.14　西会津×三島　「幻のレストラン」事前準備会
12.12〜12.13　三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」筑波大学視察
12.4〜12.5　西会津×三島　「幻のレストラン」ひしお漬け&えごリサーチ
11.24　西会津　「森をえがく—植物を介したアート・コミュニケーションの実践—」ワークショップ：西会津こども草木塔コミュニケーションプロジェクト〜みんなの草木塔をつくろう〜
11.21　西会津×三島　「幻のレストラン」料理ワークショップ
11.20〜3.13　西会津　「森をえがく—植物を介したアート・コミュニケーションの実践—」成果展：西会津こども草木塔コミュニケーションプロジェクト —草木塔、草木輪、草木子などから森をえがく—
11.14〜11.15　喜多方　「高郷プロジェクト」化石研究会（高郷例会）参加
12.11〜1.29　三島　「オフグリッドの未来へ〜アートが問いかける福島の再生可能エネルギー〜」展
10.30〜11.1　喜多方　「高郷プロジェクト」高郷町文化祭参加
11.5　三島　「地芝居をつくろう・Ⅱ　in 三島町立三島小学校」
10.28〜10.30　西会津×三島　「幻のレストラン」西方街道ウォーキング
10.23　北塩原　「森を感じる〜写真家・林明輝が訪ねた日本の森〜」
10.18〜11.15　「森のはこ舟セミナー@三島」
10.7　三島　「森 光 水 —Natural Energy Valley MISHIMA—」筑波大学視察
10.11〜10.12　三島　「地芝居をつくろう・Ⅱ　in 三島町立三島中学校」
10.10〜10.31　「森のはこ舟セミナー@喜多方」
10.7〜10.9　喜多方　「agemos」制作発表展
9.26　南相馬現地見学会
9.14　「森のはこ舟フォーラム in 南相馬〜つなみがおしえてくれたこと〜」
9.6　西会津×三島　「幻のレストラン」大地の芸術祭視察
9.5　「森のはこ舟セミナー@西会津」
8.22〜23　西会津　「森をえがく—植物を介したアート・コミュニケーションの実践—」自然をつかって描くワークショップ
8.7　西会津×三島　「幻のレストラン」キックオフミーティング
8.2〜8.8　西会津×三島　「幻のレストラン」メンバー顔合わせ会
7.27　喜多方　「画廊星醫院 展示企画 喜多方博物館 —五十嵐久悦と絵画— × 喜多方高校美術展」
7.28　喜多方　「楚々木の森」体験ワークショップ
7.19　三島　「サイの札をつくろう」
7.4　西会津　「草木をまとって山のかみさま」
6.13
5.16

開催趣旨

四季折々に豊かな表情を見せる森は、多くのめぐみを与えてくれる命の泉です。森は、山、里、海、そして人の心の豊かさを生み育ててきました。

人々は、森から糧を得、器を家を造ってきました。森は、恐れ崇める場であり、安らぎの場でもありました。

浜辺の松林、里山の広葉樹林、奥羽山脈のブナ林。はま、なか、あいづの森が県土の７割を占める福島は、森のくにです。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により、福島県は大きく傷つけられました。大量の放射性物質が拡散し、多くの人々はふるさとを離れ、今も将来への不安を抱えながら暮らしています。

私たちは、福島再生のために、美しい自然と人々が愛しみ育ててきた豊かな森林文化をテーマとした新たなアートプロジェクトを展開し、未来へ希望を発信するとともに未来に向かう福島のイメージの創造を目指します。

コンセプト

森につどい、学ぶ

ふくしまには、豊かな森があります。
生命の重み、自然の恵み、生きるための知恵。
かつて私たちの先人たちは、森から多くを学んできました。

しかし、今、私たちは森を離れて遠く仰ぐようになりました。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故は、
私たちが、これまでに失ってしまったことが
いかに大きかったかを明らかにしました。
大きな犠牲と代償に代えて気づいたそのことへの答えを、
大切に育てなければなりません。

だから今、私たちは森につどいましょう。
そして先人の知恵と知識を受け継ぐ森人たちに導かれ、
もう一度森から学びたいのです。

森で考え、未来を創る

森に秘められた教えを読み解くのは、
このプロジェクトに参加するアーティストたちとあなたです。

森の草木、森の祈り、森の暮らし、森のエネルギー、森の食。
森の懐に抱かれたそれらの宝物にそっと触れたい。

アーティストたちと森に学んだ後、
森の宝物をあなた自身に活かして欲しいのです。

森人と
アーティストと
あなたと。
森に学んだことから、私たちの今を変えましょう。
そして、未来を創りましょう。

森は、私たちを未来に運ぶ「はこ舟」なのです。

委員長メッセージ

一年のうち何度か会津盆地はすっぽりと霧に包まれる。
盆地に被せた大きな蓋のような霧を抜け、
盆地を取り巻く山の中腹に出る。
そこでは天空の視界を得て霧の蓋は雲海となる。
海原にはいくつもの山の頂、尾根が浮かんでいる。
漕ぎ出す舟のように。
独りでありながら結ばれているように。
その一つ一つに古代からの記憶を刻んだ生き物、草木、暮らし、祈りがある。
白く輝く会津の海に浮かぶ方舟の船団。
これは幻ではない。
この地を、この地に住まう人々を未来へ誘う方舟。
私たちは小さな浮標（ブイ）となろう。
舟を導くために。

森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会委員長
赤坂 憲雄（福島県立博物館長）

ディレクターコメント

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故は、福島に大きな爪痕を残した。
放射能の影響は、県土の約７割を占める広大な森にも及び、震災から月日がたとうとも、未だ復興への道のりは遠い。

福島にとって森は宝である。
人々は古来から、森と共に生き、森から多くを学び、豊かな文化を築きあげてきた。
私たちはこの文化を、これからも守り育てなくてはならない。そして、この受け継がれて来た文化でしか成し得ない復興がある。
今の福島に必要なことは、見慣れた山、見慣れた川、見慣れた空の風景を、もう一度自分以外の誰かと、眼差しを共有し、見つめ直すことでは無いだろうか。

森の文化は、人々を包摂する力をもっている。
先人から受け継がれて来た知恵や技や物語を、多くの人々と共有することで、異なった幾つもの価値観が交わり、またそこから新しい価値が生み出されてゆく。
それこそが、人々の生命力へとつながる森の文化である。

森のはこ舟アートプロジェクトは、アーティストと共に、森を見つめる時間と場所を創造する。
福島の未来は、人々が森を見つめる眼差しの先にあると感じている。

森のはこ舟アートプロジェクト ディレクター
伊藤 達矢（東京藝術大学特任助教）

実行委員会

○ 委員長		県立博物館	館長	赤坂憲雄
○ 副委員長		県文化振興課	課長	鶴見宏幸
○ ディレクター		東京藝術大学	特任助教	伊藤達矢
○ コーディネーター		県立博物館	専門学芸員	川延安直
		県立博物館	主任学芸員	小林めぐみ
○ アドバイザー		アーツカウンシル東京	ASTT(※1) ディレクター	森司
		アーツカウンシル東京	ASTTプログラムオフィサー	佐藤李青
○ 事務局	事務局長	特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク	事務局	遠藤和輝
	事務局広報担当	特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク	事務局	渡部あきこ
	事務局会計担当	特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク	事務局	笠間拓朗
○ 喜多方WG	コーディネーター	空のある生活	代表	五十嵐恵太
		特定非営利活動法人まちづくり喜多方	代表理事	蛭川靖弘
		一般社団法人IORI倶楽部		金親丈史
	事務局	特定非営利活動法人まちづくり喜多方		佐川友美
	事務局	特定非営利活動法人まちづくり喜多方		清水夏穂
○ 西会津WG	コーディネーター	西会津国際芸術村	(株)西会津町振興公社職員	矢部佳宏
	事務局	comera		鈴木菜奈
		(株)西会津町振興公社		蒲生庄平
○ 三島WG	コーディネーター	特定非営利活動法人わくわく奥会津. COM	地域コーディネーター	三澤真也
		特定非営利活動法人わくわく奥会津. COM	理事長	五十嵐政人
	事務局	特定非営利活動法人わくわく奥会津. COM		五十嵐健二
○ 猪苗代エリア		はじまりの美術館	館長	岡部兼芳
		はじまりの美術館		小林竜也
○ 北塩原エリア		北塩原村教育委員会公民館班	班長	相原哲也
		北塩原村教育委員会公民館班	主査	布尾和史
○ 福島県		県文化振興課	主幹	大波真吾
		県文化振興課		永島一彦
		県文化振興課		河原翼
○ その他構成メンバー		特定非営利活動法人Wunder ground	代表	島崎圭介
		特定非営利活動法人Wunder ground	副代表	阿部峻久

※1 ASTT：Art Support Tohoku-Tokyoの略称です。

喜多方市 ワーキンググループ
喜多方市
喜多方市美術館
ZOO 法人まちづくり喜多方

西会津町 ワーキンググループ
西会津町
西会津国際芸術村
ZOO 法人西会津ローカルフレンズ
（株）西会津町振興公社

三島町 ワーキンググループ
三島町
三島町教育委員会
ZOO 法人わくわく奥会津.COM

北塩原
北塩原村教育委員会教育課公民館班
※実行委員会で協力しながらアートプロジェクトが実施できる基盤を構築していく。

猪苗代
はじまりの美術館
※実行委員会で協力しながらアートプロジェクトが実施できる基盤を構築していく。

南相馬
協力団体模索中
※実行委員会で協力しながらアートプロジェクトが実施できる基盤を構築していく。

エリアプログラム開催地

喜多方エリア
美しい蔵の街なみ、飯豊山の伏流水がわき出る水路、市街地を取り囲むなだらかな山々。商人の街と豊かな山間地の二つの顔を持つ地域です。

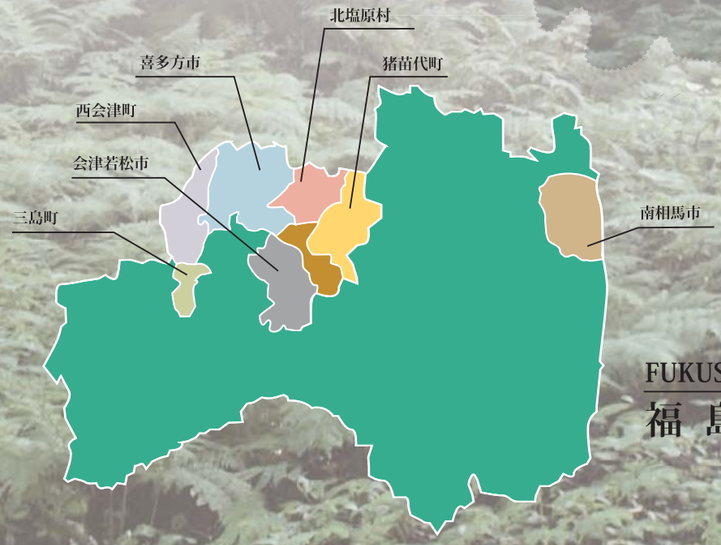
西会津エリア
かつては会津と新潟を繋ぐ街道の宿場町として栄えました。信仰の町としても知られ、「山の神」を祀る大山祇神社は町の象徴的存在です。

北塩原エリア
雄大な磐梯山の山容と個性的な湖沼群が、四季折々の美しさで人々を魅了する北塩原村。この地の森に囲まれた会場で、写真家・林明輝が森の写真展を開催しました。



猪苗代エリア
猪苗代湖と磐梯山を擁する猪苗代町。2014年に開館した「はじまりの美術館」との協働で、猪苗代の森や木々、輝く雪や湖水をテーマに、現代美術家・木村崇人が自然と触れ合えるアートプロジェクトを展開しました。

三島エリア
町の中央を流れる只見川沿いに集落が広がる山間地。蔓や樹の皮を素材とする編み組細工など、森と生きる人々の文化が今も息づいています。



FUKUSHIMA
福島県

伊藤 達矢 × 遠藤 和輝 × 川延 安直

Tatsuya Ito
ディレクター

Kazuki Endo
実行委員会 事務局長

Yasunao Kawanobe
コーディネーター



プロジェクトの中心メンバーが語る
森のはこ舟の理念と、これからの展望

２年目を終えた森のはこ舟アートプロジェクト。まずはここで、中心メンバー３人にお集まり頂き、今年の成果や再確認しておくべき理念などについて語ってもらいました。はこ舟の船体を支える「龍骨」のカタチを探ります。

ネットワークの扇の要
福島県立博物館とNPO「FAN」

――まずは2015年度の事業を振り返って、それぞれのお立場から得られた収穫などについてお話ください。

伊藤「２０１５年は、森のはこ舟アートプロジェクトが去年までやってきたことを、だいぶ整理できた一年になったという気がしています。一番大きな成果は、ＮＰＯ法人ＦＡＮ（ふくしまアートネットワーク）という組織の動きを作れたことです。このＮＰＯは、森のはこ舟アートプロジェクトが開催される三つの地域のワーキンググループ（以下「ＷＧ」）のネットワーク構築と、全体のプロジェクトマネジメントを担う組織です。これまでは、どちらかというと各地のＷＧが個別でプロジェクトを管理していましたが、今年はＦＡＮができたおかげで、各地の組織の間にネットワークが生まれています」

川延「そうですね。興味深いのは、ＦＡＮの担い手も、各地のＷＧもアート専門の人員ばかりではないということです。プロジェクト発足当初から、森のはこ舟の事業に関わっている西会津のＮＰＯ法人ローカルフレンズも、もともとふるさと宅配便などを作っていたＮＰＯですし、三島も喜多方もまちづくりのＮＰＯです。そういう役割の違う組織を繋ぎ合わせる接着剤としての力がアートにあるということだと、改めて感じています」

伊藤「これまでは、それぞれの地域で個別にやってきたけれども、森のはこ舟が立ち上げられてから、お互いの活動に気づき出して、何か一緒にやりましょうと、ある種の繋がりが生まれたんですね。その繋がりが生まれたということが１年目くらいまでの成果だったと思います。今年はさらにそれを深めて、小さな町同士のネットワークを作っていくことをイメージしてきました。福島や郡山など大きな都市部で決定されたことを放射状に各地に伝えていくあり方ではなく、小さな町同士が隣同士で繋がっていくような地域社会ですね。それを作っていくには、各地のＷＧが動きやすくなるようなマネジメント組織が必要でした。それでＦＡＮが構想されたというわけです。白羽の矢が立ったのが、ここにいる遠藤さんです」

遠藤「いつの間にか事務局を任されてましたね（笑）。ぼくはもともとはイベント企画の会社を立ち上げて音楽イベントなどをやっていたので、アート関係者ではありません。だから最初は、本業とは違う環境で勉強させてもらいたい、くらいの考えだったんです。でも、実際に関わってみてアートの見方が変わりました。最初は作品を展示することばかりイメージしていたのですが、食についてのワークショップや、地域の歴史や文化を知るためのトークイベントなど、企画のレンジがとても広い。続けていくうちにアートの面白さに気づかされました」

伊藤「ＮＰＯを作ろうという話になったとき、どこかの地域のＷＧが事務局をやるという選択肢は考えませんでした。そうではなく、実行部隊とは違った団体が事務局をやりつつ、ネットワーク構築のための動きを作らなければならないと考えていたんですね。そうでなければ、どこか１つが仕切ることになり、各地の特性を活かしきれないと思ったからです。もともとアート関係者ではなかった遠藤さんが、こうして事務局長を務めているんですから、アートには本当に接着剤としての力があるんだと思います」

遠藤「実際、若松でも色々な団体が繋がって行われる事業はたくさんあります。でも、どーんと大きくやって予算を使うだけ使ったら終わり、というようなものが多い印象です。でも、森のはこ舟は、まずそれぞれの地域がやりたいことやって、その後に連携が生まれていく感じなんですね。連携のための連携ではない。それぞれの地域がまず主体としてあるわけです。ＦＡＮの運営も、それぞれの地域の活動を邪魔しないことを重視しました」

伊藤「ネットワークが生まれた背景には、もちろん、ここに福島県立博物館があるということが重要です。扇をイメージするとよくわかると思います。風を生み出すのは扇の端のほうだけれど、要がしっかりとしていなければ強い風は生まれません。それと同じで、博物館やＦＡＮが要になり、会津地区という扇全体を動かして風が生まれたというイメージですね。やはり博物館の存在感はとても大きいと思います」

森のはこ舟「以前」に、
作られていた素地

――震災後に県内各地で様々なアートプロジェクトが開催されてきましたが、これだけ広範囲にネットワークが生まれているのは、会津の特異性だと思います。やはりその中心には博物館があると思いますが、改めて博物館の位置づけ、役割などについてお話ください。

川延「なぜここに博物館があるのかといえば、会津地区の歴史的な層が厚いということがまずあるでしょう。その厚みは、やはりアートプロジェクトにも浸透していきます。美術だけではなく、農産物、道具、伝統工芸、あるいは無形の生活の知恵など、あらゆる地域資源が眠っています。その奥会津の地域資源を活用できないかということで、『奥会津アートガーデン』[※1]という企画をやることになっていました。会津若松ではもう１つ、２０１０年に第１回が開催された『会津・漆の芸術祭』[※2]という企画もあり、その２つで、会津全域をカバーする文化事業にしようという開催計画だったんです。しかし、アートガーデン開催の直前に震災が起きてしまいました」

伊藤「そこで生まれたのが『週末アートスクール』[※3]でしたね。漆の芸術祭で繋がっていた芸術家たちとの関係が生きました。浜通りや中通りの子どもたちに会津の自然に触れてもらう機会をつくろうというものでしたが、その場所が、まさに今、森のはこ舟の開催場所にもなっている三島と西会津、

※1
奥会津アートガーデン
２０１１年に開催が予定されていたアートプロジェクト。会津地方の中山間部（三島町、昭和村、南会津町、柳津町ほか）での展開を見込んでいたが、東日本大震災により中止に。

※2
会津・漆の芸術祭
福島県立博物館が主体となり、２０１０年から３年間にわたって開催。会津の漆文化をさまざまな側面から捉え直し、歴史の深さ、文化の豊かさそして街の魅力を伝えることを目的にスタートし、漆職人、漆芸作家ばかりでなく多数の現代アーティストも参加した。

※3
週末アートスクール
２０１１年11月～２０１２年３月の間に、喜多方市、西会津町、三島町で実施したアートプログラム。東日本大震災で被災した方々を主な対象に、会津の豊かな自然の中でアーティストとともにクリエイティブな体験をしてもらおうという目的で企画された。Art Support Tohoku-Tokyoの一環。
２０１２年度２０１３年度は、福島藝術計画×Art Support Tohoku-Tokyoの一環として開催。


伊藤 達矢

喜多方だったんです。この企画があったからこそ、森のはこ舟の素地ができたんだと思います」

川延「アーティストとの関係は、実はそれ以前の２００８年くらいから始まっていました。『岡本太郎の博物館』という企画がきっかけです。その時に初めて、我々は「生もの」という言い方をしますが、作家さんたちに博物館を使ってもらおうと考えて、館内の色んなところに作品を置いてもらったり、パフォーマンスしてもらうことにしました。そのときには、伊藤さんにも大変お世話になりました」

伊藤「そうでしたね。『週末アートスクール』は、当時の『東京文化発信プロジェクト室』、現在は『アーツカウンシル東京』[※4]と名前が変わっていますが、そこが被災三県を支援しようと『ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO』[※5]という事業をやることになり、福島でも事業展開しようとしたんですね。そこで受け皿になったのが福島県立博物館でした。２００８年から取り組んできたことが、地域のネットワークが生まれるまでになっている。これこそ森のはこ舟の成果の１つだと思います」

川延「そこで重要だったのが、行政と行政ではなく、地域のＮＰＯに信頼を置いて任せると言うスタンスだと思います。予算だけ頂いて博物館でやることもできたけれど、そうではないやり方をとったわけです。最初にその事業の管理をお願いしたのが、西会津の地域おこしのＮＰＯだったということです」

伊藤「繰り返しになりますが、森のはこ舟の担い手となっているＮＰＯは、アートの関係者ではないんですね。むしろ『アートって何？』って人たちだった。そこにアーティストが入っていくことで、地域の人間が『アートってこういうことかもしれない』と気づいていく。その流れが、西会津、喜多方、三島のＷＧに成長していったんです。それができたのは、やはり地域の中での精神的な拠点があったからこそだと思います。単に文化事業をやるということだけでは地域活動は生まれてきません。博物館という文化施設の役割を地域に拡張することができる、あるいは役割を社会装置として機能させられる学芸員がいたことが、やはり大きな鍵だったような気がします。川延さん、そして小林めぐみさんという２人の学芸員の存在は、プロジェクトの素地を作る上でも、本当に重要なものだったと思います」

もぞもぞと焚き火をつくる

――最近では、大地の芸術祭や、瀬戸内国際芸術祭など、大型アートプロジェクトが各地で開催されています。森のはこ舟も「地域」にフォーカスされているという意味では共通していますが、企画の立て方や進め方そのものがまったく違いますね。どのようなコンセプトで企画が立てられているのでしょう。

伊藤「さっき遠藤くんが、イベントについて語ってくれていた話にも共通するのですが、森のはこ舟の作り方というのは、大きなイベントを１発やって終わり、ということはやってないんですね。この期間中、地域を色々見て回れるというようなフェス的アートプロジェクトでもありません。どこかで何かがもぞもぞと動いている『もぞもぞアートプロジェクト』なんです」


『岡本太郎の博物館』福島県立博物館 2008 年

遠藤「たしかに（笑）。ただひたすらずーっともぞもぞしてますもんね」

伊藤「例えば、キャンプファイアみたいに大きな火を眺めようという企画だと、大きな火が主役になります。そして、その火に対してみんな同じような感情を込めていく。つまり画一的なんですね。でも森のはこ舟は小さな焚き火をいくつも作って、それぞれの小さな火をみんなで囲んでいくんです。フォトジェニックなキャンプファイアと違って、焚き火をカメラで撮影しても火はあまり映りません。それでも、それを囲んでいる人たちや交わされる言葉、時間を大事にしていくようなプログラムをやってきました」

遠藤「確かに、キャンプファイアだと、近くの人の顔が見えても、火の向こう側にいる人の顔は見えませんよね。でも焚き火なら、そこにいるみんなに声が届く。確かに森のはこ舟のプロジェクトは、作品を作るんだか、食を楽しむ企画なんだか、それが果たして芸術なのかすらよくわからないんです。でも、常に何かしらもぞもぞと動いている。その動いてる状態というのが大事なのかもしれませんね」

伊藤「焚き火は、個々人の多様性を許容するための火であって、多様な人たちの考えを画一的にするための炎じゃないんです。同じように、森のはこ舟でやっていきたい事業というのは、大きなお祭りをして画一的な結論に導くことではなく、『もぞもぞ』を作っていくことで多様性を担保していくということなんですね。そういう振る舞い自体が、森の文化に通ずるようなところがあるんじゃないかと思っています」


川延 安直

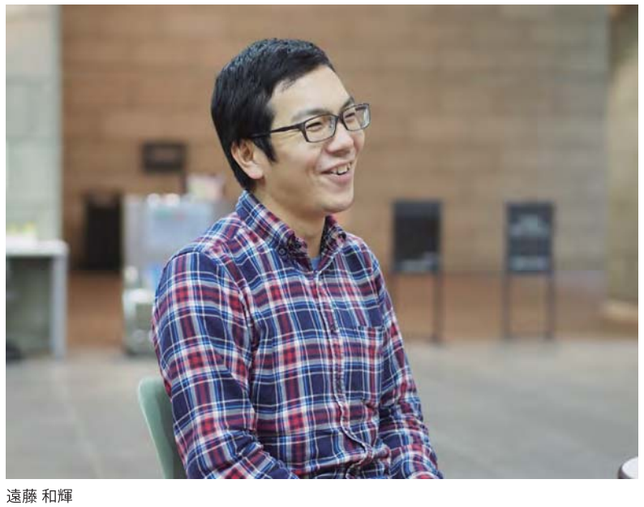
川延「森って、昔からそこにあるものですよね。森の暮らしもまた、遠くから運んでくるのではなく、そこにあるものを使います。それで充分豊かな暮らしができるんです。実はそれが最高の豊かさなんだと思います。他から買わなくていいわけですから。豊かさが目の前にある。そしてそこに多様な命が育まれ、人はその多様性の恵みを享受しながら、文化を培ってきました。森のはこ舟も同じで、そこに暮らす人たちが、アーティストの力を借りながら、そこにあるものに気づき、その価値を再確認していくということです。ですから当然、時間はかかるし、大きなプロジェクトは生まれにくいかもしれません」

伊藤「森のはこ舟は、様々なそうした関わりを大切にしているプロジェクトだと思います。例えば、演劇って、まずはそこに演者がいて、それを見る鑑賞者がいて、劇が進行する時間の軸がある。これに対して、美術館などで作品を見るという場合は、演者がいるわけではないし、時間軸は見る人に委ねられています。でも森のはこ舟は、この中間にいるのではないかと思うことがあるんです。見る側見られる側の境もあいまいで、誰が演者かわからない。アーティストかもしれないし、住民かもしれない。つまり演者と観客の境目すら曖昧なんですね。会期も設定されてないし、作ってるのか、展示してるのかすらファジーなんです。そういう状態に作っていくために、会期を設定して観覧マップを作って展示を巡ってもらうという展覧会スタイルにはしませんでした。１つひとつのプログラムを小さく開いていくことを通年を通して続けていくことで、アーティストと地域の人たちの関係性を変えていくんです」

川延「よくわかります。一方で、多様性が認められているからといって、何をやっても許されるというわけではありませんよね。『アート』の取り組みですから、作品としてのクオリティをどう担保するのかということは、常に考えていかなければなりません。確かに地元の人たちとのやりとりは、その場所を初めて訪れるようなアーティストにとっては難しい問題でもありますが、やりやすいほうに進んでしまってはいけない」

※4
アーツカウンシル東京
東京における芸術文化創造のさらなる促進や東京の魅力向上を図ることを目的として、公益財団法人東京都歴史文化財団の中に発足。助成事業をはじめ、さまざまな文化政策に関わる。

※5
Art Support Tohoku-Tokyo
東京都が芸術文化を活用した被災地支援事業として実施しているアート事業。地域のコミュニティや現地の団体と協働して数々のプログラムを展開。福島県では「福島藝術計画 × Art Support Tohoku-Tokyo」として福島県、東京都、アーツカウンシル東京の共催というかたちをとっており、「森のはこ舟アートプロジェクト」もこの一環で開催されている。


遠藤 和輝

伊藤「そうですね。ぼくは、半分以上はアーティストを信じるということだと思っています。信じるというか、表現が難しいんですが、信じられる関係を作るということですかね。アーティストの力が発揮できるような環境を作ることが何より重要だと思うんです。どんなに優秀なアーティストに来てもらったとしても、初めての土地で丸投げでは力を発揮することはできないはずです。ですから、いかに作品を作るかではなく、いかに関係をつくるか。ここを重視しないと、プロジェクトを進めることが難しくなってしまいます」

遠藤「その部分では、エリアコーディネーターの皆さんにはとても慎重に動いてもらっていると思います。作家によっては性格も作風も違いますし、『どこまでが作品なのか』も異なります。その意味では、コーディネーターが動かなければならない局面もありますから、地域の人たちとアーティストの距離感だけでなく、アーティストとＷＧの距離感もとても大事です。近づきすぎてもいけないし、遠すぎてもいけない」

伊藤「つまり、アーティストと地域の人たちの関係性を変えるということに繋がってきますよね。これまでの既存のアートプロジェクトと決定的に違うのはそこだと思います。１つひとつのプログラムを小さく開くことを通年で続けていくことで、アーティストと地域の人たちの関係性が変わり、それを通じて地域の見え方が変わってくる。そしてその『見え方が変わる』ということが、何よりの成果なんだと思うんですね」

川延「そこで大事なのは、これまでの既存の価値基準で成果を判断してはいけないということですよね。新しい関係性を作っていくわけですから、そこには『動員数』などの数の論理を持ち込むわけにはいかない。むしろ、新しい価値判断の軸を作るところから始めなければならないかもしれません」

伊藤「そうですね。集客が必ずしもすべての評価指標ではないということをはっきりさせたうえで、評価指標そのものを更新させていきたいという思いは強くあります。成果を、どれだけ大きな活動が生まれたかではなく、どれだけ深い体験や考え方が育まれたのかに移していく。これは数字では見えないから説明しにくいのだけれども、説明責任を果たすためだけに文化事業を設計してしまうと、そこで失われてしまう本来の成果があるんじゃないか。そのことを、復興支援の企画だからこそ大事にしていこうと思っています」

森のはこ舟の価値を、言葉にしていく

２０１６年は事業３年目になります。どのような展望を描いているのでしょうか、それぞれの立場から取り組んでいきたいことなどをお話し下さい。

遠藤「今までは『アートをやるよ』というと、地元の人から抵抗があるというか、異物を受け入れるような感じがありました。ところが、人口減少と高齢化が進んでいる西会津でも、最近ではまったく抵抗がなくなってきていますし、逆にアートを通じて地域のことを知ることができて面白い、という声が大きくなってきました。じわじわ、もぞもぞと、それぞれの地域のコーディネーターが動き続けています。その動きを、今年はしっかり発信していきたいと思っています。私たちは、NPO として一歩引いたところから、つなぎ役、発信役を担うことができると思うんです」



『会津・漆の芸術祭 2012』 くいぞめ椀プロジェクト

川延「そういうノウハウを、私たちも博物館として広げていきたいですね。それに、新しい人たちにも面白さを知って欲しいと思っています。そこで伝えていきたいのは『もてなし』です。地域とアーティストを行き来するような事業を経験すると、もてなしの達人になれると思うんですよ。『サービス』といったものではなく、どれだけ自分の持っているものを相手が必要としているかたちで提供できるか。それが本来の『もてなし』なんだと思います」

遠藤「そうですね。確かにアーティストと地元の住民との間に入るというのは、とても繊細な対応が求められますし、マネジメントを通じて得られた経験はとても大きいと思います」

川延「もてなしのスキルは、どこに行っても使えるものですし、どこでも必要とされるものでもあると思います。日本中でそういう人たちを作っていく。どこで災害があるかわかりませんから。アーティストと地域のミスマッチを防ぐという意味でも、もてなしの精神を持った人たちを育てていかなければなりません」

伊藤「そういう『もてなし』の精神みたいなものって、すごく大事なんだけれど、うまくやれている地域に行くと、みんな『何も意識してない』なんて言うんですね。でも自然にそんなことができるはずがない。きっと本能でやっているのかもしれないけれど、実は、そこには何らかのロジックがあって、色々なものが積み重なって、奇跡的な空間ができているわけです。それらを、しっかりと言葉に残していく。この報告書もそうだと思います。言葉として残していく必要があると思うんです。プログラムだけを挙げて『こんなことをやりました』と言うのではなく、奇跡的な空間を成り立たせている本当の要素を価値化していかなければなりません。森のはこ舟という事業で、どんな価値が生まれたのか、その小さな価値そのものを紡いで、拾い上げていく。まさにその『価値化』に取り組んでいく２０１６年にしたいと思っています」

遠藤「例えば、西会津などは、森のはこ舟以降、様々な取り組みが行われるようになっています。廃校を利用した『西会津国際芸術村』などの利用も活発になってきました。地域おこし協力隊の応募が相次いでいて、たった１人の募集に対して十数人もが応募してきているそうです。小さいもぞもぞがいろいろなフックとなって、町のなかに生まれてきているんですね。西会津といえば、福島県内でもトップクラスで高齢化が進んでいる町です。そんな町で生まれているものを、都市部の指標で比べられるはずがありませんよね」

伊藤「改めて思うのは、森のはこ舟で生まれた『もぞもぞ』は、数十億円かけられるような取り組みと、文化プロジェクトとしての重要性はまったく変わらないんだということです。『ＦＡＮ』というＮＰＯがあったことで連携できたり、まったく違った価値観の業種や世代が繋がっていけるんだということを、しっかり可視化させていきたいですね。そうして可視化させながらプログラムを組んでいくことで、『もぞもぞ』自体の価値も高まっていくと思います」

伊藤 達矢 Tatsuya Ito

1975 年、福島県生まれ。2006 年 東京藝術大学大学院芸術学美術教育専攻 修了（博士号取得）。現在、東京藝術大学美術学部 特任助教。東京都美術館と東京藝術大学の連携によるアートコミュニティ形成事業「とびらプロジェクト」および、上野公園内に集積する９つの文化施設を連携させたラーニングデザインプロジェクト「Museum Start あいうえの」では、プロジェクト・マネージャーを務め、社会とアートを結びつける活動に従事する。

遠藤 和輝 Kazuki Endo

1986 年、福島県生まれ。ＮＰＯ法人ふくしまアートネットワーク事務局長。
公立大学法人会津大学大学院博士前期課程コンピュータ理工学研究科にて修士号を取得。2013 年、ＴＡＫＬＡＭ（タクラム）というイベント制作・企画・運営会社を設立。会津若松を中心に音楽やアート、ものづくりに関わり、新しいものを生み出す「つくる人」を応援する事業を展開している。

川延 安直 Yasunao Kawanobe

1961 年、神奈川県生まれ。筑波大学大学院芸術学修士修了。岡山県立美術館を経て、現在福島県立博物館専門学芸員。「福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO」や「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」など、福島県内のさまざまな文化発信活動に携わっている。

赤坂 憲雄 × 小林 めぐみ

Norio Akasaka
「森のはこ舟アートプロジェクト」実行委員会委員長

Megumi Kobayashi
コーディネーター



なぜ、博物館でアートなのか？
博物館だからこそできた取り組みとは？

「森のはこ舟アートプロジェクト」の成り立ちと福島県立博物館の関係性について、森のはこ舟実行委員会委員長で福島県立博物館長の赤坂憲雄さんとコーディネーターで主任学芸員の小林めぐみさんに訊きました。

“開かれた博物館”であるために、想いの受け皿となるために

――「森のはこ舟アートプロジェクト」にとって福島県立博物館の果たす役割はとても大きいものに感じます。そもそもなぜ博物館でアートに取り組む動きが出てきたのか、そのあたりからお話いただけますでしょうか。

小林「福島県立博物館では 2007 年ごろから“開かれた博物館”を目指してさまざまな試みをしてきました。たとえば詩人の和合亮一さんに展示物の前で朗読パフォーマンスをしていただいたり、エントランスホールで現代美術家のやなぎみわさんに能を上演していただいたり。展示室や収蔵資料だけにとどまらないあり方を模索し始めたのがこの頃です。それが結実したのが 2009 年の企画展『岡本太郎の博物館・はじめる視点』展。常設展示と相対する形でアーティストに作品を制作・展示してもらいました。作家の目線が入ることで、博物館がもともと持ってるものを違った角度から見せてくれたように思います」

赤坂「私が福島県立博物館長に就任したのが 2003 年。その頃、博物館はある種の停滞感の中にあったと言ってもいいと思います。とってもいい博物館なんですよ。でも時間が経つ中で、置き去りにされつつあった。それを打開するための試行錯誤のひとつが、現代アートを博物館の中に導き入れることでした。そもそもヨーロッパなどでは美術館も博物館も等しく“ミュージアム”と呼びますよね。しかし、日本では明治以降制度的に分断されてきてしまったんです。その垣根を少しでも低くして、博物館と美術館がもう一度出会う場を作りたいというのが私の中にはありました。その中で開催した『岡本太郎の博物館・はじめる視点』展は、もう批判の渦だったよね（笑）。土偶の脇に現代アーティストの作品がなんのことわりもなしに置いてあるんだもの。観に来た人たちの中にも混乱した人がいたと思います。でも僕の目から見ると通常展示って開館以来ずっと一緒で、見飽きている部分もあった。それがアーティストの作品が置かれることによって場にカオスが導入され、緊張感が生まれる。いろんな問いかけや対話が始まる。革新的で発見に満ちたおもしろい試みだったように思います」

小林「ここでたくさんの現代アートの作家と出会ったことが、のちの展開にとっても大きな財産になっていきました」

――その後、2010 年から福島県立博物館主導による初めての芸術祭『会津・漆の芸術祭』が行われましたね。しかし、翌年には東日本大震災と東京電力福島第一原発の事故。博物館としても、アートを扱う意味においても大きな出来事であったかと思います。

小林「そうですね。震災があって人と自然がどう関わったらいいか、もう一度考えなくてはと思うようになりました。単に文化の掘り起こしや地域が元気になるというコンセプトの立て方では、私自身もう事業ができなかったんです。ありがたいことに、作家さんたちからも『何か手伝えることはありませんか？』という申し出をたくさんいただきました。そこで、博物館は彼らの受け皿になって、その想いを少しでも多く福島や東北に伝えていこうと、漆の芸術祭の続行を決め、同時に東京都の文化による復興支援事業との連携が生まれ、週末アートスクールなど文化面から福島の復興に繋がる活動を始めたのです」

赤坂「アーティストたちは混沌としている福島で何ができるか、そしてアートって何だろうという問いを抱えて、止むに止まれぬ気持ちで参加してくれました。彼らもこういった災害の後の世界にいることで、アートも何者かで有りうるという確信を少しずつ手に入れていったのかもしれません。アーティストはカナリアです。敏感で傷つきやすい。そのカナリアたちがおずおずと何かをはじめることによって、大きな災害の後で言葉を失っている人たちが巻き込まれ、生じていた分断や対立が柔らかく溶けていく。アートというわけのわからないものが仲立ちしなければ言葉を交わせなかった人たちが出会う。それがアートの力を信じ直す機会になっていったのだと思います」

森林文化を見つめ直すことの重要性

――それまで育んできた多くの人々との繋がり、そして県からの打診もあって 2014 年に『森のはこ舟アートプロジェクト』が誕生しました。森林文化をテーマに掲げた背景にはどのような思いがあったのでしょうか。

赤坂「福島には森がたくさんありますよね。とりわけ会津にいると森の中に町や村が浮かんでいるイメージを持ちます。その中で育まれた漆や伝統野菜、狩猟などの文化もまた森に内包されるもの。植物的、生物的なだけではない“森”をどうソフト化し、育成していくか、私はずっと考えてきました。今、里山は荒れています。それをもう一度再生させていくためにも森林文化をテーマにすることを決めました」

小林「漆の芸術祭では“自然と人との関係”を大きなテーマとしてきました。コンセプトとしてはやや硬かったような気もしていますが、森のはこ舟にはそれがスタート時から内包されていて、三島で EAT & ART TARO さんが行った『食のはこ舟』でのトチ餅作り、西会津で村山修二郎さんが行った『森をえがく ―植物を介したアート・コミュニケーションの実践―』での草木塔制作など、より具体的なかたちでプログラムに繋がっていきました。森のはこ舟アートプロジェクトは、会津にまだ残っているこれらの文化を、意識して考える場所にもなりうると思います」

赤坂「本当はなぜ森なのかと言うと、原発事故で森が汚されてしまったことへの怒りと悲しみなんですよ。ただ牧歌的に森の話をしたいのではなく、森で捕れた獣を食べられないというような現実をきちんと確認していきたいんです。人と自然の関係性を探れば探るほど、壊されていることにも出会いますが、それは隠すべきことじゃない。持っていたものを失ってしまったという視点もまた大切だと思います。そういった複雑な想いが 2 年間やってみてすごく出てきました。今の福島だから出てくる問題がある、それを伝えなくちゃいけないと感じています」

――3 年目を迎える『森のはこ舟アートプロジェクト』が向かうべき方向とはどんなところとお考えですか？

赤坂「『福島の森が今どんな状態にあるのか』、そんな問いかけをしながらやっていくことでしょうか。里山の再生が叶わない限り、福島の再生もないと言えます。会津の森も汚れてはいますが、その度合はすごく少ない。他の地域では除染のためにどんどん木が切り倒されていますから。だからこそ会津の森を、里山を再生させていきたいと思う。再建のために何が必要か、これまでの動きをふまえ実践編に進むべきときと考えます」

小林「私は震災以降の福島にとってアートが役に立っていると信じています。森のはこ舟アートプロジェクトは、1 年目で基盤を整え、2 年目では力を溜めて事業が動かせるようになってきました。3 年目は数年先までのビジョンを見据えたプログラムの設計ができればいいなと思います」

赤坂 憲雄 Norio Akasaka

1953 年、東京都生まれ。民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館長。「森のはこ舟アートプロジェクト」実行委員会委員長。東北学を提唱し、1999 年に『東北学』を創刊。2011 年以降は、東北でのフィールドワークに基づき、東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故により東北が直面にしている問題について講演や著作活動も行っている。

小林 めぐみ Megumi Kobayashi

1972 年、福島県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修了。福島県立博物館主任学芸員。美術工芸を主とする福島県内の文化資源について調査。2010 ～ 2012 年に開催された「会津・漆の芸術祭」の企画運営も手がけた。震災以降は「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」や「福島藝術計画×ASTT」に携わる。

福島県立博物館のアート事業の歩みと「森のはこ舟」誕生まで

~2009

2009

様々な表現ジャンルのアーティスト × 福島県立博物館常設展の歴史資料
企画展『岡本太郎の博物館〜はじめる視点〜』
監修：吉田重信氏、渡邊晃一氏、伊藤達矢氏、伊藤将和氏



2007

福島県立博物館が「開かれた博物館」を目標に掲げる
第３土曜イベントの開催
詩人が歩く、昔と歩く@県博
和合亮一、等



福島県立博物館収蔵資料 × 現代アートを試行した展覧会の開催
企画展『老い―老いをめぐる美とカタチ』
記念公演『古典芸能に見る老いの姿―博物館能　会津能楽会・やなぎみわ joint 公演』

2008

福島県立博物館「開かれた博物館」を発展
けんぱくミュージアムイベントの開催

2010

福島県立博物館がこれまでの調査研究成果を活用し、地域の文化資源をテーマに館内外でネットワークを築きながら活動開始

博物館の文化ストックをアーティストが編み直す行為の継承発展

『会津・漆の芸術祭2010』（事務局：福島県立博物館 × 福島県文化スポーツ局文化振興課）



『アクアマリン・潮風アート茶会』（主催：福島県立博物館／環境水族館アクアマリンふくしま）



2010~2012
NPO 法人まちづくり喜多方が『会津・漆の芸術祭』の喜多方インフォメーションセンターを担う
自主的に地域で滞在制作を行うアーティストが現れる

2011

1 月〜3 月
都市部（会津若松市・喜多方市）のアートプロジェクトである『会津・漆の芸術祭』（事務局：福島県立博物館）と対となる、中山間地（三島町・昭和村・南会津町・柳津町等）を開催地とする『奥会津アートガーデン』（事務局：福島県文化スポーツ局文化振興課）立ち上げ準備

2011年 3月11日
東日本大震災
東京電力福島第一原子力発電所事故

➡奥会津アートガーデン事業中止
➡会津・漆の芸術祭事業凍結

単に地域の文化的活性化を目的とした事業の開催ではなく、体力のある会津、体力のある県立の文化施設＝福島県立博物館が福島や東北へのエールの受け皿となることを目指す

4 月〜
日比野克彦氏（アーティスト／東京藝術大学教授）、『ハートマークビューイング』（以下 HMV）展開。福島県西会津町、喜多方市の避難所などで開催

会津・漆の芸術祭のコンセプトを再設計
会津・漆の芸術祭ホームページで「東北へのエール」の募集開始
東北へのエールとなる作品、プロジェクトプランを順次公表

日比野克彦氏、伊藤達矢氏、福島県立博物館訪問
HMV 福島立ち上げ（2 次避難所だった東山温泉の旅館、会津の中学校、仮設住宅、被災地の交流スペースなどで開催）



5 月
『会津・漆の芸術祭 2011〜東北へのエール〜』開催決定

2011

6 月
日比野氏の HMV がきっかけとなり、東京文化発信プロジェクト室（2015 年よりアーツカウンシル東京）森司氏、佐藤李青氏、福島県立博物館訪問
Art Spport Tohoku-Tokyo 福島（以下 :ASTT 福島）立ち上げ
事務局：NPO 法人 NPO 西会津ローカルフレンズ
構成団体：NPO 法人まちづくり喜多方、NPO 法人奥会津 .com、福島県立博物館、等

奥会津アートガーデン開催準備の素地を ASTT 福島のプログラム『週末アートスクール』へ活用
福島県立博物館が協働することでワークショップの背景に地域の文化・歴史要素を盛り込み、福島が喪失した地域への誇りの再構築を図る
その他、ASTT 福島 2011 のプログラムとして『南相馬アートのあそびばプロジェクト』、等



7 月
飯舘村の支援団体『いいたてまでいの会』設立
避難所等でのワークショップ、アーティストによる聞き書きなど実施
いいたてまでいの会、ASTT 福島の事務局機能の一部を担う

10 月〜11 月
『会津・漆の芸術祭 2011〜東北へのエール〜』
漆に関わらなくとも「東北へのエール」となっている作品も選考、展示



2012

1 月〜
ASTT と福島県文化スポーツ局の文化事業の協働模索

4 月
福島藝術計画 ×ASTT 誕生（事務局：NPO 法人 NPO 西会津ローカルフレンズ）
福島県が ASTT の共催となる

7 月〜
福島県立博物館主体の文化による福島の復興支援事業を主目的とした事業立ち上げ
『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト 2012』〜（事務局：福島県立博物館）

『会津・漆の芸術祭』は福島の文化の豊かさ、人と自然との関係性についてのメッセージを発するコンセプトに特化

10 月〜11 月
『会津・漆の芸術祭 2012〜地の記憶 未来へ〜』（事務局：福島県立博物館）
福島県立博物館主催の『会津・漆の芸術祭』終了

福島藝術計画 ×ASTT に被災地での事業展開のミッション

2013 年 1 月
いわき市の NPO 法人 Wunder ground と『週末アートスクールいわき』を協働

2013

福島県森林計画課より福島県立博物館に対し、森林文化を広めるソフト事業としての『会津・漆の芸術祭』の継続開催打診

2010 〜 2012（事務局：福島県立博物館）
→『喜多方・夢・アートプロジェクト 2013』〜（事務局：喜多方市）
→『会津・漆の芸術祭』2013 〜（事務局：会津若松市）

より広く福島の森林文化や、震災後の福島だからこそのメッセージを発するアートプロジェクトとして福島県主催文化事業の開催を模索

4 月〜
福島藝術計画 × ASTT2013（事務局：NPO 法人 Wunder ground）
『週末アートスクール』
『学校連携ワークショップ』、等

2014

2014 年
1 月〜
福島藝術計画 ×ASTT
『週末アートスクール』等で構築した基盤を活用し、NPO 法人まちづくり喜多方、NPO 法人 NPO 西会津ローカルフレンズ、西会津町振興公社、NPO 法人わくわく奥会津 .com、福島県文化振興課、福島県立博物館等により
福島芸術計画 ×ASTT の一環として福島の森林文化をコンセプトの基盤とした『森のはこ舟アートプロジェクト』立ち上げ検討

森のはこ舟誕生

2014 年
4 月〜
福島藝術計画 × ASTT2014（事務局：NPO 法人 Wunder ground）
『いわきコミュニティプロジェクト』
『学校連携ワークショップ』
福島県のアートプロジェクト発信事業
『森のはこ舟アートプロジェクト』、等

『森のはこ舟アートプロジェクト 2014』（事務局：NPO 法人まちづくり喜多方、福島県文化振興課）は、個別に実行委員会を形成
喜多方エリア、西会津エリア、三島エリアで展開

2015

5 月〜
NPO 法人ふくしまアートネットワーク誕生
（『森のはこ舟アートプロジェクト』の事務局となる）
『森のはこ舟アートプロジェクト』に参加するメンバーが中心となり結成。文化芸術活動を通して、地域に住む人々や団体を結びつけ、地域振興、地域の活性化を進めることを目的として発足

福島藝術計画 × ASTT2015
（事務局：NPO 法人 Wunder ground）
『いわきコミュニティプロジェクト』/『学校連携ワークショップ』/ 情報発信事業 /『森のはこ舟アートプロジェクト』、等

『森のはこ舟アートプロジェクト 2015』（事務局：NPO 法人ふくしまアートネットワーク）
喜多方エリア、西会津エリア、三島エリアに加えて、猪苗代エリア、北塩原エリアが拡充

9 月
南相馬市でフォーラムを開催

事務局



森のはこ舟アートプロジェクト 実行委員会事務局長

遠藤 和輝
Kazuki Endo

喜多方、三島、西会津、この3つの地域のネットワークを育みながら、全体のプロジェクトマネジメントを担ったのが、事務局の遠藤和輝さん。事務局長としての立場からプロジェクトを語って頂きました。

事務局の役割とは、森を見渡すこと

――各地のワーキンググループのサポート役ということで、『縁の下の力持ち』の役割に徹した１年だったかと思います。今年１年取り組んできたことからお話頂けますか？

「私たち事務局の役割は、プロジェクト全体の把握や広報、それから報告書のとりまとめなど。あくまでサポート側に回っています。昨年度までは、喜多方ＷＧが兼務で事務局を担っていましたが、今年は地元にできたＮＰＯ法人にその役割を委託しています。それが、私の所属する、特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク、通称ＦＡＮ（ファン）です。この法人は、昨年５月に、アートプロジェクトを活用した地域振興、地域活性化を行う団体のネットワーク構築や支援を目的として作られた団体です。実際にアート事業を実施するＷＧを根元から支える、そんな担いをした１年だと感じています。

それに加え、事務局単体で実施した事業もありました。例えば、２０１４年度の事業報告も兼ねたキックオフフォーラム。ディレクター伊藤達矢さんにお話し頂いてコンセプトを共有しつつ、各エリアのコーディネーターからこれまで実施してきたプログラムの報告と各エリアの今年の抱負を共有いただきました。さらに、今年は東日本大震災で甚大な被害を受け、今なお避難区域の残る南相馬市でフォーラムと現地見学会を実施しました。南相馬市は２０１９年には植樹祭も予定され、復興・再興に向けて必死に頑張っている地域です。震災・津波・原発と様々な環境変化があり、現在の状況をしっかりと受け止め、そしてこれからの自然環境を考える、そんな機会となりました。特に現地見学会は環境の変化を間近で見られる非常によい機会であったと思います」

――南相馬ですか。一見すると会津とは距離的にも離れているし「森」というイメージがありませんが、実際にはどのような感じでしたか？

「南相馬の西部に豊かな阿武隈の山並みがあり、その麓には里山、そして里山から海に注ぐ川、海があります。海といっても、砂浜や磯場があったり干潟があったりして、とても多様なんですね。今回は、震災後に群生しはじめた絶滅危惧種のミズアオイなどを見て回りました。実はこの群生地は、津波の後に生まれたところでした。津波は町を破壊しましたが、自然環境にとっては、もともとあった状態に戻ったというほうが正しいかもしれません。自然と人の関わりがよく見える場所でもあるんです。ツアーバスには、南相馬市博物館学芸員の稲葉修さんに添乗いただきました。自然環境だけでなく、そこに文化や歴史的な背景を織り交ぜた話をしていただいたことで、より“森”について深く知ることにつながりました。稲葉さんは、震災前から南相馬に住んでいる方でもありましたので、生々しい現地の声も伝えることができたと思います。森のはこ舟アートプロジェクトは、スタート時点では確かに会津から始まっていますが、福島県全体を見ると、会津の里山と南相馬の海が豊かな“森”によってつながっていく姿をイメージできると思いますし、震災と原発事故を経験した福島県の森のあり方というものが見えて来るのではないかと思います」

文化とアートの力で、新しい寄り合いをつくる

――森のはこ舟アートプロジェクトが始まり、これまで２年に渡り各地でプロジェクトが行われてきたことで、色々な副次的効果も生まれてきていると思います。遠藤さんが強く感じることはありますか？

「森のはこ舟アートプロジェクトの各エリアの動きを見ていて、人が集まる場所・機会が地域に増えたなと感じます。一つのアートプログラムの実施にあたって、地域の住民や周辺市町村の方など多くの人を巻き込んで、何度も何度も集まって、テーマとなる地域資源を深く掘り下げる作業をする。その中で新しいコミュニティができて、地域間のネットワークであったり、個対個のネットワークであったりを構築する一助ともなっているなとすごく感じます。一見わかりにくい、こういう『もぞもぞ』は、地域にとって必要な活動であると思っています。例えば、２０１４年に三島で行われた『森の祈り×サイノカミ』の事業は、その後三島町とアーティストが直に地域に繋がって、予算もついて事業が引き継がれました。森のはこ舟がきっかけになって町が巻き込まれた形です。こうして後に残るもの、三島の三澤さんの言葉を借りれば“飛び火”を作れているのは、大きな成果だと思っています」

――確かに“飛び火”という言葉は印象的で、森のはこ舟の効果を表す言葉だと思います。遠藤さん自身、この“飛び火”を作っていくには何が大事だと思いますか？

「重要なのは、やはり元々その地にある歴史と文化をしっかりと知ることと、それをどうにか面白くしようとする“もぞもぞ”ですかね。それがあれば世代を超えて、地域を越えてたくさんのネットワークができると思います。都市部では忘れ去られつつある文化や知恵、歴史が森には息づいていて、若者がそれを学びに森に行き、そこでコミュニケーションが生まれて、いつの間にかアートプロジェクトが立上がってくるんです。アートを介することで、地域や世代の区切りとかそういう人間が勝手に作り出した壁を取り払ってくれて、人と人との対話と合意のなかでプロジェクトが進んでいるというのを、森のはこ舟の活動の中では何度も見てきました。実際に三島と西会津の合同プロジェクトでは、両地域の町長が揃って参加し、普段は直接話せないような方ともコミュニケーションが取れる機会となりました。つまり、アートを介することで、既存のコミュニティとは異なる繋がりが生まれるんです。森のはこ舟を通じて、こういう新しい寄り合いが生まれていくんじゃないかと期待していますし、この動きを会津だけでなく県内に派生させていきたいと考えています」



活動拠点「蒲生館」
住所：福島県耶麻郡西会津町野沢字原町乙 2207-1
TEL：090-5357-3381(遠藤)

遠藤 和輝　Kazuki Endo

1986年、福島県生まれ。ＮＰＯ法人ふくしまアートネットワーク事務局長。公立大学法人会津大学大学院博士前期課程コンピュータ理工学研究科にて修士号を取得。2013年、ＴＡＫＬＡＭ(タクラム)というイベント制作・企画・運営会社を設立。会津若松を中心に音楽やアート、ものづくりに関わり、新しいものを生み出す「つくる人」を応援する事業を展開している。

森のはこ舟フォーラム 2015



プログラム概要

２０１４年の活動を振り返り、２０１５年の新たな展望を語る場としてフォーラムを開催した。第１部では、「森のはこ舟アートプロジェクト」の概要と、また、森とともに暮らし、森の姿をよく知るたくさんの“森人”とのエピソードを共有した。森林文化に絶えず身を置く森人は、地域とともにある魅力あふれる森をたくさん気づかせてくれた。トークセッション「森で生きる人々」では、「森」というテーマで、これまでの活動から感じたこと、私たちの活動は何ができるのかということを来場いただいた方々と共に一緒に考える機会とすることができた。

地域への影響など

今回のフォーラムには、アートに関わる人、森に関わる人、地域に住む人など多様な方々が参加した。森林文化をテーマとし、アートという手法で伝えていく活動を行ってきたことで、森に関わる人に限らず、多くの方に興味を持って関わってもらえる活動となっていることを実感した。また地域の特色を生かし、普段からあった、当たり前のものがアートという手法によって、新しい地域の魅力に変えていこうとする本事業の活動をフォーラムを通して多くの方と共有できた。

開催日 2015.5.16　　**会場** 福島県立博物館 講堂

参加者数 ５５名　　**関係者延数** ２０名

登壇者 実行委員会委員長　赤坂憲雄（福島県立博物館館長）
ディレクター　伊藤達矢（東京芸術大学特任助教）
喜多方市エリアコーディネーター　金親丈史、佐川友美
西会津町ワーキンググループ代表　蒲生庄平
三島町エリアコーディネーター　三澤真也

聞き手 小林めぐみ（福島県立博物館主任学芸員）　　**モデレーター** 川延安直（福島県立博物館専門学芸員）

メディア掲載情報 福島民報、福島民友、河北新報社

【第１部】　事業説明

各エリアで活動してきたワーキンググループの代表者が登壇し、2014 年度の活動報告を行った。喜多方からは地域の人々へ協力を得るための意思疎通の図り方や、プロジェクトを進める上での試行錯誤を、西会津からは、地域活性化の目線でプロジェクトがどのように町の人々に受け入れられ、根付こうとしているかを、そして三島からは EAT & ART TARO 氏の「食のはこ舟」の事例をもとに、地域の文化を後世に残していくための、“手段としての”アートプロジェクトのあり方がそれぞれ語られた。３地域の発表に共通していたのは、「現代アート」を地域の人々に伝えるのがいかに大変かということ。そして、それを解決するためには地域との密なコミュニケーションが大前提である、ということだった。知られざるプロジェクトの裏側に、集まった観客も熱心にメモを取りながら聴き入っていた。







【第２部】トークセッション「森で生きる人々」

福島県立博物館の館長で本プロジェクトの実行委員長でもある赤坂憲雄氏と各エリア登壇者によるトークセッションが行われた。過疎化が進む会津の山村には、古来より森人たちが紡いできた文化が、伝統が、暮らしの知恵が今なお息づいている。その素晴らしさに改めて気づかせてくれるものがアートであり、アーティストたちであるという内容のトークに、「森のはこ舟アートプロジェクト」の意義を改めて見つめ直すこととなった。質疑応答の時間では、喜多方エリアのプロジェクト「楚々木樂舎」に参加していただいている集落の住人が、「おかげで集落が元気になりました。ありがとうございます！」と、ステージ上の登壇者に深々と頭を下げる一幕があり、その姿に会場から惜しみない拍手が贈られた。



森のはこ舟フォーラム in 南相馬　～　つなみがおしえてくれたこと～



プログラム概要

東日本大震災において、福島県内の沿岸部の中でも特に津波被害の大きかった南相馬市で、絶滅危惧種・ミズアオイが花を咲かせはじめた。森は、里や海ともつながり、互いに連動しながら自然環境を作っている。そこで、震災による津波以降の植生の変化や自然環境に焦点を当てながら、自然と人間の共生について考えるための場として南相馬にてフォーラムを開催した。山・里・海の連環について語るゲストを招き、フォーラムの参加者とともに、福島県内の自然環境や地域における森の役割について改めて考える場とした。

地域への影響など

南相馬フォーラムの開催にあたり、南相馬市や周辺地域で事業を行っている NPO 団体などから広く協力を得ることができた。今後、南相馬で本事業を行っていくうえで大きな関わりを構築することができた。参加者の中には関東など県外から参加した方もおり、今なお大きな爪あとが残ったままの現状を地域の人々と共有できたことで、南相馬の再生・復興のために我々は何ができるのかを深く考えるきっかけとなった。生態系や植生、アートといった様々な視点で山・里・海の連環をテーマとしたことは、本フォーラムを有意義なものとした。

開催日 2015. 9. 5　　**会場** 南相馬市市民情報交流センター・マルチメディアホール

登壇者
森 誠一（岐阜経済大学教授）　郷土財を活用した復興まちづくり：大槌町の湧水環境
稲葉 修（南相馬市博物館学芸員）　ミズアオイをめぐって
五十嵐 靖晃（アーティスト）　千年樟と「くすかき」
遠藤 雄幸（川内村村長）　阿武隈に生きる

参加者数 ４２名
関係者延数 ２３名

メディア掲載情報 福島民報、福島民友、毎日新聞

南相馬現地見学会







プログラム概要

現地見学会では、自然と人間の共生について考える一つの機会として、津波以降の南相馬市周辺の植生の変化や自然環境を見学した。浸水域の湧水地にて植生の変化を知り、さらに絶滅危惧種のミズアオイが群生している場所や絶滅危惧種のメダカが増えている場所など、大きく自然環境が変化した場所を見学した。さらに、かつて日々の営みにあった養蚕と織物業を復活させようと活動している団体の取り組みを見せていただき、南相馬市で復興に向けて活動する方々との交流を行った。また、被災建物がそのまま残っている地域も見学し、南相馬の現状を知るとともに、今後の南相馬について話をする機会とした。その中で山・里・海のつながりや、防潮林・防風林のような震災で失われた木の文化を今後いかに自然との共生を考えたものとして受け継いでいけるかを考える機会とした。

地域への影響など

地元参加者からは、「改めて自地域の状況を知る機会となり、実際に住んでいても気づかなかったこと、新しい発見があり、今後の南相馬市の環境を考えるきっかけとなった」という声をいただいた。また、県外の参加者からは、「被災地ツアーという募集だと、今なお苦しんでいる地元の方々を想うと非常に参加しにくかったが、今回は山・里・海の連環がテーマであったことで参加しようと積極的に考えることができた」という声をいただいた。被災地ツアーということではなく、テーマを植生や自然環境の変化とし、その視点から今の南相馬を見てもらうという切り口だったことの効果であろう。森林文化をテーマにし、アートという手法で地域資源を活用する本実行委員会ならではの企画であったと認識している。また、参加者からは、「自分の目で今の南相馬市の現状を見られたことはいい経験であり、私たちが認識している状況と異なることがたくさん起こっているんだということを肌で感じることができた」という声もあった。現地見学会とフォーラムを連日開催し、フォーラムでの講演にとどまらず、実際に現地を見る機会を提供できたことは重要であったと改めて感じた。

開催日 2015. 9. 6　　**見学地** 南相馬市原町区、小高区

ガイド 稲葉 修（南相馬市博物館学芸員）

参加者数 ７名
関係者延数 １５名

森のはこ舟セミナー





プログラム概要

身近な森との関わりについて知り、もっと森への関心、興味を持ってもらう一つのきっかけとして、森のはこ舟セミナーを開催した。各エリアの特色である森の文化から、森と生きる知恵、森とともにある暮らしについてゲストと共に考える場とした。

西会津は、ミネラル野菜や雪下野菜など野菜作りに力を入れており、「伝統野菜」というテーマから先人が脈々と受け継いできた野菜作りの術を知るセミナーとなった。

喜多方は、「漆」をテーマに、地元で漆の木を育てるところから、漆を掻き、木地を作り、塗るという伝承されてきた技を生活の糧としてきたゲストを招き、人々の生活で身近にあった漆について深く学んだ。

三島は、昔から人の生の営みとして行われてきた「狩猟」をテーマとして設定し、その歴史や今のあり方から森の暮らしを考える場とした。

地域への影響など

参加者が一方的に聞くだけでなく、ゲストと対話ができるように少人数規模で実施したことで、より理解を深められるセミナーとなった。セミナーという形式にしたことで、地域の人々が積極的に参加しやすいプログラムとなった。また、森の中に生れる創造的な営みについて参加者同士が対話をし、共有できる場となるよう心掛けた。各セミナーの最後では、来場者からの質問や感想も募り、より深く各テーマを掘り下げることができた。身近にあるものがテーマとなることで、アーティストや職人、大学の教員など様々な立場と視点から価値を共有していく場を作ることができた。

開催日
2015.8.7 西会津 会場：西会津中学校 多目的ホール
2015.9.26 喜多方 会場：上三宮遊樹館
2015.10.17 三　島 会場：つるの IORI

参加者数 １３０名
関係者延数 ２３名

セミナー長 赤坂憲雄

ゲスト
西会津：江頭宏昌(山形大学農学部准教授)、渡部智史(映画監督)、佐々木長生(元福島県立博物館学芸員)
喜多方：貝沼航(NPOはるなか漆部会副会長)、秋葉良栄(漆職人)、佐藤達夫(漆芸家)
三　島：田附勝(写真家)、菅家藤一(猟師)

メディア掲載情報 福島民報、福島民友、ＮＣＴ西会津ケーブルテレビ

森に暮らす人

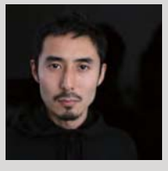


プログラム概要

森に住む人、森と生きる人々を映像で記録し、ホームページにて公開するプロジェクト。美術家・映画監督の藤井光氏が、喜多方・西会津・三島の森に住む人・森と生きる人を訪れ、その暮らしや生き様を丁寧に追いかけていく。森人たちの姿から浮かび上がるものとは……。記録映像は、ホームページに公開し、福島の森の文化を多くの方々に紹介する予定。

地域への影響など

森が生活のそばにあり、年代や性別、生活状況などが異なる人たちと森との関わりを記録するために、地域内にいる多種多様な森に関わる人たちを調査した。その中で今年は２人の人物に密着して撮影を行い、喜多方・西会津・三島と異なる３つのエリアで異なるタイプの人物像と森との関わりが如実に記録されている。密着する中で一つ一つ新しい発見があり、それを形にするために、引き続き活動を継続していく。今後は、彼らの生き様を丁寧にとらえていき、彼らの姿から福島の森の文化を多くの方々に紹介できるよう編集作業を進めていく。



藤井 光
美術家。映画監督。パリ第8大学美学・芸術第三博士課程DEA卒。2005年に帰国後、現代日本の社会政治状況を映像メディアを用いて直截的に扱う表現活動を行う。3.11以降の被災地で災害と芸術の関わりをテーマに各地で撮影を続けてる。

喜多方



エリアコーディネーター

五十嵐 恵太
Keita Igarashi

今年度から喜多方エリアのコーディネーターを務める五十嵐恵太さん。五十嵐さんが関わりを深くした背景には、喜多方ならではの「町と森の関わり」があるようです。

町から森へ向かう独特のスピード感

――喜多方は町のイメージが強いですが、どのように森との接点を作ったのでしょうか。

「喜多方は『蔵の町』とも言われるように、全域が『森』と関わりの深い地域とは言えません。ですから、町が森とどう付き合っていくのか、町から森にどのように導線を作っていくのかをプロジェクトでは重視しました。今年は、市内の中心部から少し離れた楚々木（そそぎ）集落と、高郷町と２カ所でプロジェクトを行いましたが、普段の生活では森と接点の少ない方に声をかけて森に集まってもらったり、リサーチの報告を通じて森のことに興味を持ってもらえるように計画をしていきました。町で生活をしている方にとっては、普段の生活の中で森に関心を持つことはほとんどないでしょうが、『アート』が森への入り口になってくれて、森へ接続する回路になってくれたように思います。森へ通うことで森の見方が変わり、付き合い方も変わる。それがじわじわと感じられるようになってきました」

――具体的にはどのようなプロジェクトが行われたのですか？

「『楚々木樂舎』では、楚々木地区で使われなくなっていた廃校を利用した『場づくり』を行い、そこを会場にして夏、秋、冬と季節を変えて３回のワークショップを実施しました。廃校が子ども達の声であふれ、集落の方がとても喜んでくださったことが印象的です。調査活動や勉強会などがオープンな企画になっていることも特徴です。『高郷プロジェクト』では、高郷町が広範囲なこともあってフォーカスの仕方がまた違います。１年目のリサーチを基に、アーティストが地域のボートレースなど市民行事に参加しながら、そこに暮らす人たちへのフォーカスを進めてきました。地域へ入っていくスピードがゆっくりなのが特徴かもしれません。どちらのプロジェクトとも、いきなり来て何かを作るということではないですね。地域の人足や、行事のお手伝いを重ねて、集落の方との距離感を近づけていったりと、すごく丁寧なプロセスを経てプロジェクトが進んでいます」

アートをきっかけに 森の見方や関わり方を変えていく

――五十嵐さんは、今年からエリアコーディネーターに就かれていますが、プロジェクトとの関わり方を変えた背景には、どのような事情があったのでしょうか？

「活動の主体となっている『NPO まちづくり喜多方』では、ここ数年、若者の受け入れに力を入れてきました。地域の様々なプロジェクトを任せて実戦の経験を積んでもらい、社会に出る一歩手前の学びの場となっていたんです。森のはこ舟の喜多方での活動が始まった時も、NPO の若者が主体となり試行錯誤しながらプロジェクトを進めていましたが、経験の少ない若者中心だと、プロジェクトをこなすことだけで精一杯になってしまっていました。そんな様子を見ながら、もっとこんな風にしたらいいのにな、と思うところもあって、私自身がアートと関わってきた経験を基に、今年からコーディネーターをやらせてもらうことになりました。100％の成果を目指すのではなく、120％を目指す。考えをもって進めていけば、若者達の力も充分に発揮されます。そして、アートプロジェクトではアーティストが帰った後に残されたものを、地域の人たちに引き継いでいくことが大切だと私は考えています」

――五十嵐さんが考えているのはプロジェクトの持続性ということでしょうか。持続性を生んでいくためには、プロジェクトには何が必要だと考えていますか？

「アートの面白さって『モノの見方』だと思うんですね。目の前にあるものに対して、１つの答えにこだわらず別の見方を模索するのはアーティストと呼ばれる人たちの得意とするところです。地元の人にとっては当たり前に見えるものが、見方を変えると実は新しかったり、他にない特別なものだったり、そういうことが実際に活動を通して発見されてきています。例えば、森のはこ舟と関わることで、森に対する見方が変わったり、森との接し方が変わったり、そうした人が一人でも増えていくこと、それがまさに成果だと思います。そして、アートを通した体験を、特に子ども達に経験して欲しいと思っています。全国的に学校のなかで美術の時間が減らされている中、こういったアートプロジェクトは地方でアートやアーティストと関わることができるとても貴重な場とも言えます。アートプロジェクトを通して人が育って土壌を作っていくというイメージでしょうか。町である喜多方には、そんなことも求められていると思います。成果を数値化することは難しいけれど、森の見方やアートに対する考え方がじわじわと変化していくようなプロジェクトが仕掛けられたらいいですね」



活動拠点「食堂つきとおひさま」
住所：福島県喜多方市寺町南 5006
TEL：0241-23-5188

五十嵐 恵太 Keita Igarashi

1977 年、山口県生まれ。武蔵野美術大学油絵学科 2001 年卒業。個展、グループ展を多数開催。油彩、アクリル画を中心に幅広い作品を制作。2011 年に喜多方に移住し、１年間かけて古民家を改装した「食堂つきとおひさま」を夫婦で営む。教員として高校で美術を教えたり、デザイナーとして WEB 制作に携わった経験もあり、その経験を活かして喜多方でアートを楽しむ場を創造していきたいと考えている。喜多方アートスクール「空のある教室」主宰。

高郷プロジェクト





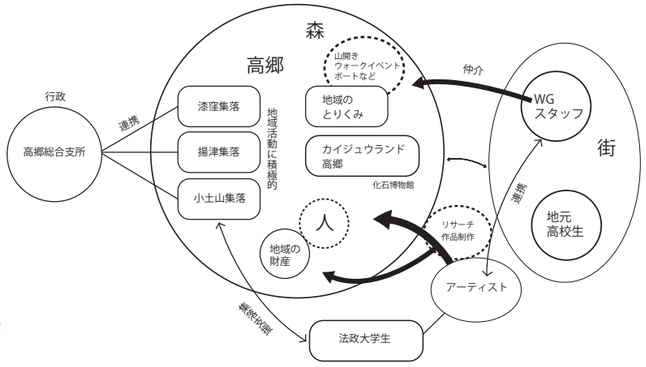

プログラム概要

喜多方の街場とは対照的な森と川のエリア「高郷」を舞台にして森の地域の「人」に焦点をあて、リサーチを通して得た成果を地域の財産として形にしていくプログラム。2015 年度は「地域の取り組みへの参加」を通してリサーチを展開。地域住民とコミュニケーションを交わし、それらの活動記録を基に作られた映像作品を高郷町文化祭にて発表した。また、かつて海であった高郷で発掘された化石にも着目。クジラの化石を発見した当時女子高生であった女性にインタビューを行い、記録映像として化石博物館「カイギュウランドたかさと」にて発表した。

地域への影響など

高郷は喜多方市の中でも、高齢化、過疎化の問題に直面している地域と言える。本プロジェクトでは、現在の森の地の例として「高郷」の人々の生活や取り組みを、アーティストの表現を媒介にして目に見える形にしている。成果が積み重なるにつれ、「高郷」の生活や地域の取り組みがカタログのようなものに形づくられていくことになる。一例として、化石博物館「カイギュウランドたかさと」との連携のもとで、クジラ化石の発見者の方にインタビューを行い記録映像を作成したが、博物館の通常では収集が難しいであろう「人の記憶の記録」はアートプロジェクトならではのアプローチであったといえる。博物館側の希望で記録映像を寄贈をし、館の恒久的な展示資料となることになった。

相関図





稲垣 立男

アーティスト。
共同作業を通した地域や他者とのコラボレーションによるアートプロジェクトを国内外で実施している。2009年、新潟県／越後妻有アートトリエンナーレなど各地の国際展に参加。近年の活動に、2013年、福島県／喜多方・夢・アートプロジェクト「喜多方博物館—五十嵐久悦と絵画—」など。アーティストインレジデンスやワークショップ、講演の機会も多い。現在、法政大学国際文化学部教授。

プロジェクトスケジュール

【リサーチ】 2015.4.18 ～ 19、5.15 ～ 17、5.30 ～ 31、7.10 ～ 12、7.25 ～ 26、7.31 ～ 8.2、9.25 ～ 27、10.30 ～ 11.1、11.13 ～ 15、2016.2.7 ～ 8、2.18 ～ 21、2.29

【作品発表】 2015.10.31 ～ 11.1 高郷町文化祭に出品
2015.11.14 化石研究会シンポジウムにて映像作品を発表
2016.2.20 ～ 2.29 喜多方エリア成果報告展示

参加者数 ３５０名
関係者延数 ４０名

メディア掲載情報 福島民報

画廊星医院展示





プログラム概要

平成 26 年に新・北方美術倶楽部（主催：喜多方蔵の会）の事業の中で、上越教育大学伊藤将和研究室の尽力により現在使われていない旧星医院の 3 室がリノベーションされ誕生した「画廊 星醫院」。新たな美術交流の場として生まれたこの空間を舞台にした展示会が行われた。アーティスト稲垣立男氏の作品「喜多方博物館 ― 五十嵐久悦と絵画―」（五十嵐久悦（大正 11 年生）：喜多方出身の教師、画家）と、久悦氏の出身高校でもある喜多方高校の美術部と有志の学生による作品が同時に展示された。稲垣氏を講師として、展示空間の構成を考えるワークショップも実施された。

地域への影響など

稲垣氏は「喜多方・夢・アートプロジェクト 2013（主催：喜多方市）」事業内で、喜多方出身の教師・画家の五十嵐久悦氏（大正 11 年生）の個人博物館を制作。この博物館には、五十嵐氏が生涯描き続けた喜多方の風景画、ご家族からの聞きとり調査を基にした教員の仕事や家族との生活の記録が展示され、これらを通じて氏のユニークな人生と地域との関わりを浮かび上がらせるものであった。その展示内容は地域の方に反響を呼び、もう一度展示をして「さらに広くの方に見ていただきたい」、という声があがっていた。その声に応え、「画廊星醫院」での展示が企画された。魅力的な空間の活用と、次世代の「喜多方でアートを担う若者」への橋渡しの場となり、多くの方に足を運んでいただいた。

開催日 2015.8.2～8.8 **会場** 画廊 星醫院

アーティスト 稲垣 立男

参加者数 １００名 **関係者延数** ４０名

メディア掲載情報 福島民報

主催 つきのわ実行委員会

協力 喜多方・夢・アートプロジェクト実行委員会、蔵の会、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会、喜多方高校美術部

楚々木樂舎　第二章





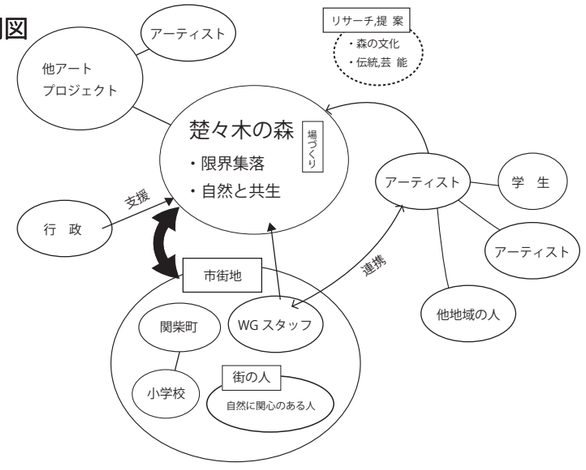

プログラム概要

喜多方の市街地からほんの少し離れた山間に悠久の棚田風景が今も残る楚々木集落。昨年に引き続き、森の文化を今に伝えるための調査を実施してきた。今年度は、”今では知られないようなしきたり”や”婚礼の手順”など「楚々木の祝祭」についての調査に着手した。また、昨年度の報告会で示した「食」「踊」「音」を発展させ、楚々木の森を体感してもらうことを目的にして夏、秋、冬と３回のワークショップを楚々木分校を拠点として実施し、たくさんの子どもたちの声が森に響く機会となった。

地域への影響など

昨年度から続けられているリサーチ活動を「楚々木の森の文化を掘り下げる縦軸」とすると、本年度は「楚々木に喜多方の他の地の方を招き、恵み豊かな自然に実際に見て触れてもらう横軸」への展開が試みられた。子ども、大人を問わず、森での体験の中で普段とは違う高揚感を胸にきざむ機会となり、楚々木に目をむけてもらうきっかけとなった。楚々木の休耕棚田や、長く使われていなかった分校を活用する構想が練られてきており、楚々木の地がアートを軸にした地域のコミュニティーの場として今後機能していくことが考えられる。2016 年から喜多方市に配属される「地域おこし協力隊」との連携も視野にいれ、山深い地域の文化や場の再活用を提案、考察していく。

相関図





岩間 賢

千葉県生まれ。アーティスト。作品においては一貫して土を素材として扱い、日本の土壁技法や中央アジアの伝統的な手法の日干し煉瓦を用いた持続可能な構造物を協働制作のプロジェクトというかたちで数多く創造してきた。設置された場や鑑賞者との対話を生み出し、アジア文化圏の風土、環境、造形的アイデンティティーを問い直す独自の表現として成立させている。2009年、越後妻有アートトリエンナーレにて1000坪の棚田を利用したランドアートを制作。2013年、市原アートミックスにて廃校を活用した創造の場「月出工舎」の創出を実践。その他、これまで国内外での作品発表多数。また国内外のアーティストインレジデンスなどにも参加し地元の方々との協働による現地制作を通じた活動も行っている。

プロジェクトスケジュール

【リサーチ】
2015.7.27 ～ 30、8.25 ～ 27、10.23 ～ 26、2016.1.14 ～ 15、2.18 ～ 21

【作品発表】
2016.2.20 ～ 2.29　　喜多方エリア成果報告展示

参 加 者 数　３００人
関係者延数　３０人

メディア掲載情報　福島民報

楚々木 冬のワークショップ





プログラム概要

楚々木の森で雪上の動物の足跡を探して、森の中を散策する「アニマルトレッキング」ワークショップを実施。そこかしこで見つけられる動物の足跡を、ガイドをしてくださった堀口一彦氏に丁寧に解説をしていただいた。２時間の散策のあと、楚々木分校に戻り「雪をつかったアイスクリーム作り」に挑戦。雪に塩を混ぜると急激に冷えることを利用して、アイスの材料を混ぜながら雪を入れたボウルで冷やしていった。室温が高く上手く固まらなかったため、再度外で挑戦。少量だが、自然の力でできたアイスを分け合った。

地域への影響など

積雪の影響のある冬のワークショップということで、会場への移動や前日に行う準備など、冬ならではの課題が目に見える機会となった。楚々木の「雪」は住民にとっては大変な労働を強いるものだが、こども達には「宝物」に見えたのかもしれない。子どもたちは雪遊びに夢中であった。３回のワークショップを通して、楚々木分校の場所としての魅力が確実なものとなった。地域の方が見学に来てくださり、参加者との交流も生まれていた。

開催日　2016 . 2 . 20　　**会場**　楚々木集落周辺、楚々木分校

講師　岩間 賢、堀口 一彦

参 加 者 数　１５名　　**関係者延数**　２０名

楚々木の森 体験ワークショップ



プログラム概要

夏の楚々木の森を体験するワークショップを開催。楚々木在住の堀口一彦氏を講師に迎え、午前中は楚々木の森での川遊びや魚釣りを実施した。午後には、長く使われていなかった楚々木分校を事前に会場として整え、岩間氏によるアートワークショップ「きょうりゅうのたまごをつくろう」を実施。親子が協働して、石膏でできた大きな玉子作りに挑戦をした。

地域への影響など

これまでの楚々木での活動の中で、利活用の期待をもたれていた楚々木分校が初めてワークショップ会場として活用された。分校は集落の集会所から市の管理へと用途変更された後、長い間有効な使用方法を見出されずにいたが、スタッフによる掃除や草刈りを経て会場として整えられた空間は予想以上に快適な場所となった。集落の方からも大変喜ばれ、今後の利用についての提案もいただいた。ワークショップ参加者は市街地から訪れた親子連れがほとんどで、「楚々木の自然豊かな景色に心を打たれた」といった言葉をいただくなど、印象深い体験となったようである。

開催日	2015.7.28	**会場**	楚々木分校	**講師**	岩間賢、堀口一彦	**参加者数**	２０名
関係者延数	４０名						
主催	つきのわ実行委員会	**協力**	空のある教室、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会				

楚々木こども市 2015

プログラム概要

秋の楚々木を舞台にしてのワークショップを実施。楚々木分校に一日限定の「こども市」を開いた。「森歩き」から始まり、楚々木在住の渡部浩氏を先頭に森で葉っぱやどんぐりを集めた後、子ども達は４つのグループ（「木工体験（講師：渡部謙一）」「そば打ち体験（講師：五十嵐徳夫）」「お菓子つくり体験（講師：五十嵐加奈子）」「お店つくりワークショップ（講師：岩間賢）」）に分かれ、講師の指導を受けながら市に並べる商品作りに挑戦。「お店」の装飾には森で拾ってきた葉っぱなどが使われ、どんぐりはお金の代わりとして使われた。商品交換のルールもこども達が考え、こども市は活況を呈した。



地域への影響など

楚々木分校を活用したワークショップ第２弾。楚々木に興味を持っていただきたいという狙いで、「地域でものづくりをされている方たち」に講師を依頼し、魅力を感じていただくことができた。楚々木分校の本校にあたる関柴小学校の子どもも多数参加し、楚々木での自然体験を楽しむ機会となった。

開催日	2015.10.25	**会場**	楚々木分校	**講師**	渡部浩、渡部謙一、五十嵐徳夫、五十嵐加奈子、岩間賢
参加者数	３０名	**関係者延数**	５０名	**メディア掲載情報**	福島民報
主催	つきのわ実行委員会	**協力**	渡部木工、そば工房水林、食堂つきとおひさま、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会		

agemos







プログラム概要

2014年に森のはこ舟アートプロジェクトの中で滝沢氏は飯豊山にまつわる映像作品「katugu」を制作。2013年夏に農家の椅子を背負って登頂した「seou」（喜多方・夢・アートプロジェクト（主催：喜多方市）参加作品）に始まり滝沢氏は「風土の記憶と飯豊山」についての表現を行ってきた。2015年は「agemos」（2015年春）『あげもうす（献上する、供える）』という会津弁の言葉をプロジェクトタイトルとして掲げ、春・夏・秋と飯豊登頂が可能な３シーズンの風景が収められた映像作品としてまとめ、2015年10月には３年間の軌跡をまとめた展覧会を開催した。

地域への影響など

３年をかけての３部作の作品となったが、喜多方の地に滝沢氏が度々足を運ぶ中で地域住民とのコミュニケーションが重ねられ、展示初日のトークイベントでは滝沢氏の話しを聞こうと会場が満員となった。作品展示の会場として、地域の住民や高校生が長年かけて交流の場として整備してきた建物が使われ、古い建物が展示空間として生まれ変わっていた。簡単には足を踏み入られない過酷な山道を記録された映像は、地元の人でも目を見張る美しい自然に包まれていた。



滝沢 達史

神奈川県生まれ。アーティスト。
多摩美術大学油画専攻卒業。場所の持つ特性や土地の記憶をもとに、様々な表現方法を用い作品を展開。これまで参加した主なアートプロジェクトに、2009年、越後妻有アートトリエンナーレ「やまもじプロジェクト」2013年、福島県／喜多方・夢・アートプロジェクト「seou」、2014年、千葉県／中房総国際芸術祭市原アート×ミックス「おかしな教室」など。国内外での作品発表多数。

展示期間	2015.8.2～8.8	**会場**	金忠 絵本の蔵・手前の蔵	**参加者数**	３００名
実施団体	喜多方・夢・アートプロジェクト運営委員会			**関係者延数**	５０名

西会津



エリアコーディネーター

矢部 佳宏
Yoshihiro Yabe

西会津エリアコーディネーターである矢部佳宏さん。西会津国際芸術村を拠点に様々な取り組みを続けています。ご専門であるランドスケープデザインの視点を交え、西会津の魅力やマネジメントについて伺いました。

変化のきっかけをつくるということ

── これまで２年間コーディネーターを務めるなかで気づかされた西会津の魅力はどんなところですか？

「実は、西会津というのは、会津の中で一番標高の低い町でありながら、標高2000m クラスの飯豊連峰がすぐそばにある。つまり高低差に多様性がある土地です。さらに、切り立った谷や盆地の広がりが同居するなど地形の多様性もあります。さらに思想的な多様性もあるんですよ。西会津は新潟経由で会津地区ではもっとも早く京文化が入ってきたということもあり、かつては研幾堂（けんきどう）という学塾から多くの偉人達が輩出されました。確かに『これだ！』という観光資源が少ないという声もありますけど、裏を返せば総合性が高いからこそ、一つ一つの要素にスポットが当たっていないのではないかと思うのです。なので、そこにアートの視点が加わることで、町の魅力や多様な文化的背景に光があたり、面白い取り組みができるはずだと思っています」

── 森のはこ舟をスタートさせて、大きく変わったところはありますか？

「2014 年を経て、アーティストとどのように関わればよいか、どう関わることが地域にとってアートの役割が生きてくるのか、町の人たちが少しずつ理解してくれたような気がしますね。心がけてきたのは、アーティストと住民の両方に働きかけるということ。いくらアーティストが『こんなところが面白いよ』ということを提示しても、そもそも住民が何とかしようと思っていなければ、プロジェクトも進みませんし、まちづくりにも繋がりません。一方、アーティストに対しても、町のことや町の未来に必要なこと、コーディネーターとしての私の考えを伝えなければ、1 人よがりなプロジェクトになってしまいます。例えば、2014 年から開催している『草木をまとって山のかみさま』では、2015 年からは私たちがアーティストからワークショップを引き継ぎ、参加者に八百万の神様になってもらうというアレンジも加えました。地域住民の意見をしっかりと汲み取りつつ、アートプロジェクトそのものをデザインしていくのも、コーディネーターの大事な仕事だと思っています。２０１６年は、神社のある町並みをアートで盛り上げようというアイデアが住民の側から生まれてきました」

川の流れは、石を一つ投げたくらいでは変わらない

── 住民側からアイデアが寄せられるというのはすごいですね。今年は具体的にどんな動きにつながりそうですか？

「『草木をまとって山のかみさま』では、地元の区長さんから『今年は大山祇神社の 参道までの町並みを、子供達の絵等を使って装飾してみたい』というアイデアが寄せられたので、参道の雰囲気を出すために日除け幕に絵を描くワークショップを提案しています。神社とアートの結びつきが１つの新しいまちづくりになってきているんですね。このほかにも、集落の活性化に関わる方から『アーティストを紹介して欲しい』なんてことを聞かれるようにもなりました。最初は、アーティストやコーディネーターからの提案を、よくわからずただ受け取っていた住民が、今や自分たちでプロジェクトにアートを活用していく段階に入っています。これは本当に大きな成果だと思いますよ。まちづくりというのは、アートにせよ何にせよ、最初は外部の力が必要でも、いずれ地域の方々が主体になっていかなければなりません」

── そのような変化は、やはり森のはこ舟特有の「時間軸」があると思います。１つのプロジェクトに時間をかけることについて、矢部さんの考えを教えて下さい。

「私の専門であるランドスケープデザインは、木を植えて３０年後に自分の思い描いてきた風景が出てくるという世界なので、そもそも成果を急ぎません。文化もそうだと思います。川に石を一つ、ドボンと投入したからといってすぐに流れが変わるわけじゃありません。石をいくつもいくつも投げ入れ続けることで、少しずつ水の流れが変わって、それによって土が浸食されたり、深さが変わったりして、そこでようやく新しい流れが出てくるわけです。そのように、日常生活のなかでの一つ一つの行為を見直すきっかけとしてアートの視点が入っていかなければならないと考えています。例えば私たちが活動拠点にしている西会津国際芸術村も同じです。子どもの頃にこの場所がなかった人にとっては、その存在が違和感として捉えられてしまうかもしれませんが、子どもの頃から芸術村が当たり前にある世代にとっては、アートの視点で日常を見ることがより近いところに感じられるようになると思います。だから、私はそのくらいの時間軸で森のはこ舟を捉えるようにしています。木が育つのも、川の流れが変わるのも、子どもたちが育って地域が変わっていくのも、１年や２年ではどうにもなりませんから。そうやって、じっくりと、少しずつ、森のことや自然のことについての価値観が変化したり、付 き合いかたが変わって行くことでしか、新しい時代は切り開かれないのではないかと思っています。その意味では、私たちは、そのきっかけを作り続けているのにすぎないのかもしれません」



活動拠点「西会津国際芸術村」
住所：福島県耶麻郡西会津町新郷大字笹川字上の原道上 5752
TEL：0241-47-3200

矢部 佳宏　Yoshihiro Yabe

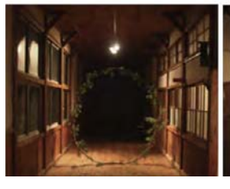
1978 年、福島県生まれ。西会津国際芸術村コーディネーター（株式会社西会津町振興公社所属）、NPO 法人西会津国際芸術村、studio CLYNE（カナダ、ウィニペグ）共同主宰、森のはこ舟アートプロジェクト西会津エリアコーディネーター、西会津町歴史文化基本構想策定委員。株式会社上山良子ランドスケープデザイン研究所、フリーランス (studio CLYNE)、NITA DESIGN GROUP、Tengtou Landscape International Creative Center を経て、現職。

森をえがく－植物を介したアートコミュニケーションの実践











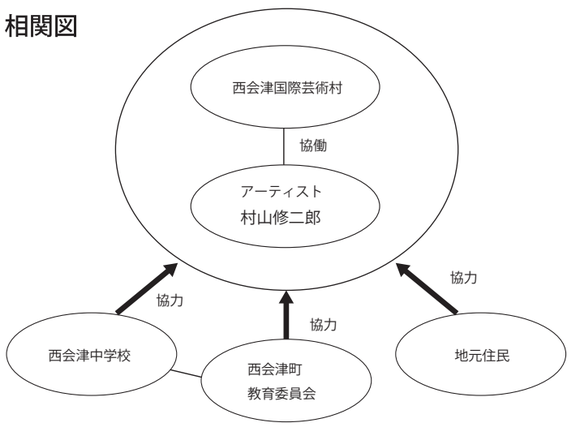
プログラム概要

２０１４年から継続している本プログラムであるが、今年度は二つの WS と展示が行われた。第１弾は、アーティストの村山修二郎氏が教員を勤める京都造形芸術大学の学生が中心となり、保育所の児童を対象に「自然を使って描く」WS を開催。葉や枝、小石など自然のものを “ 柿渋 ”“ 墨渋 ” に浸けて自由に大きな布に描いた。第２弾のワークショップは、西会津中学校３年生を対象に「草木塔を彫る」ワークショップを開催。草木塔とは、植物等の自然に対する崇敬を示す慰霊碑である。二つの WS の成果は、村山氏の滞在制作による作品とともに西会津国際芸術村に展示され、草木塔という新たな文化を西会津にもたらした。

地域への影響など

村山氏が草木塔を通じてもたらした自然に対する畏敬の念のコンセプトは、他のアートプロジェクトとの親和性が高く、西会津国際芸術村ではアートや創作等に使用した植物を草木塔で供養し、その後に緑肥として使用することが習慣化してきている。植物の持っている可能性・命の儚さなどを肌で実感できるこのプログラムは、まさにアートコミュニケーションの実践であり、今年度制作された５０基ほどの草木塔は、今後町内の様々な場所に設置される予定となっている。本プロジェクトを通して、森だけでなく自然生態系全般に対しての人間のあり様の根底となる考え方について、もう一度じっくりと読み直していくことを示唆してくれるプロジェクトであった。

相関図





村山修二郎

東京都生まれ。アーティスト。
東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻壁画修了・美術博士。植物研究、地域植生リサーチに基づいた植物に内在する初源的な力を抽出した作品を制作。2008年から「緑画（りょくが・村山が考えた造語）」と呼ぶ、草葉・花・実を画材に直接手で紙や布また壁に絵を描くスタイルによる作品制作を行っている。その他、植物に関わる社会地域活動とワークショップを様々な地域で展開中。

プロジェクトスケジュール

【ワークショップ開催日】 2015.7.27　2015.11.24

【展示期間】2015.11.20 ～ 2016.3.13　　会場：西会津国際芸術村

参 加 者 数　１００人
関係者延数　５０人

メディア掲載情報　福島民友

出ヶ原和紙再生プロジェクト





プログラム概要

かつて西会津町の出ヶ原集落で作られていた「出ヶ原和紙」は、会津藩の公文書で使用される上質な和紙であった。このプロジェクトは、後継者不足から昭和３０年代以降に途絶えてしまった和紙をリサーチし、復活させつつ、それを用いて作品を制作しようというアーティスト、滝澤徹也氏とともに始まった。和紙の原材料となる楮やノリウツギの収穫、道具の調査など紙漉きを記憶している地元の方々への聞き取り調査などを実施しながら、再生のプロセスを構築。和紙漉き工房として古民家の再生から釜づくりまで行った。この一年をかけて、様々な地元の方のご協力により、今後の再生・発展の兆しとなる第一弾の「紙」を漉く事に成功した。

地域への影響など

本プロジェクトにおける最初の紙漉きには、これまで復活に携わった方や出ヶ原集落の方々、町の教育関係者等にも広く参画を募った。また、ワークショップを実験的に町なかの旧旅館で開催すると、通りがかった方等が積極的に参加する姿が見られ、新たな地域活性化プロジェクトとしての期待も高まってきている。それに加え、この取り組みが地元新聞社に取り上げられ、さらに多くの町民が本プロジェクトへの興味・関心を持ち、参加したり、かつて紙漉きに使用していた道具を貸してくださるようになった他、県内各地からも問い合わせなどが寄せられたりするようになった。



滝澤 徹也

東京都生まれ。東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻版表現卒業。美術家、和紙職人。2009年、国の無形文化財として知られる「小川和紙」の技術継承者育成事業を修了。現在は、日本国内のみならず海外でも紙を使ったインスタレーションを行うなど、精力的に活動中。

開催日　2015.11.5　2015.12.11　2016 .1.22 ～ 23

参 加 者 数　５０名　　**関係者延数**　３０名

メディア掲載情報　福島民報、福島民友、読売新聞社

主催　にしあいづ地域づくりカレッジ、NPO 西会津国際芸術村

草木をまとって山のかみさま





プログラム概要

２０１４年に華道家の片桐功敦氏を迎え開催した草木をまとうワークショップ。地元から継続の要望があり、２０１５年は西会津国際芸術村を中心とした有志によって開催することになった。今年度は、参加者に「かみさまカード」を配り、古（いにしえ）の神々になりきってもらうことを企画。参加者は、お披露目のリハーサル→草木の装飾→衣装のアレンジ→ポートレート撮影の順に終わると、最後は笛と太鼓の演奏で行列行進しながら大山祇神社の境内へ。神楽殿で、それぞれの“かみさま”のイメージでお披露目を行った。２０１６年も開催予定のこのワークショップは、さらに地域を巻き込み、地域活性化プロジェクトとしての期待も高まっている。

地域への影響など

西会津の代表的な観光地である大山祇神社。その参拝客数が年々減少して行く中で、本プロジェクトは新たな目玉イベントとして少しずつその存在感を高めてきている。森のはこ舟アートプロジェクトのプログラムとして始った当イベントであるが、その雰囲気はあたかも伝統行事であるかの如く観光客の目を引き、その効果への期待感も年々高まっている。現在では、西会津をPRするパンフレットの表紙にも起用されるなど、西会津町においては、アートが地域活性化の重要な起爆剤として注目される契機となった。今後も継続予定で、地元住民から新たなアイデアの提案が生まれ、他のアーティストの参画をも誘引する取組みとなってきている。

開催日　2015.6.13

参加者数　１３０名　　**関係者延数**　５０名

アドバイザー　片桐功敦（華道家）

主催　主催：I am flower project（アイ・アム・フラワー・プロジェクト）、NPO法人西会津国際芸術村、にしあいづ観光交流協会
協力　大久保自治区、中野区村おこし実行委員会、大山祇神社、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会

海と山の結婚式～草花をまとって祝福しよう～





プログラム概要

南相馬市で初めての開催となる「草木をまとう」ワークショップ。花道家・片桐功敦氏の呼びかけに南相馬市博物館や地元の有志などが中心となって運営にあたった。華道家・片桐功敦氏の監修の元、県内各地から集まった草花を身にまとった子供達や参加者は、海辺の砂浜に移動しポートレート撮影。まとった草花はそれぞれ海へと還した。ワークショップの最後には、舞踏家：李美喜氏による草木をまとった舞踏が即興音楽とともに披露された。、森のはこ舟アートプロジェクトの「草木をまとう」ワークショップから派生したI am flower projectは、これまでのノウハウの共有や、放射線数値が高く採取して纏うことの難しい会場付近の植物に代わる植物を会津から持ち寄るなどの協力を行った。

地域への影響など

このように、山深い幾つかの地域から持ち込まれた植物を砂浜で纏い、それを海へと還すという行為はまさに「海と山」が結婚する祝祭のようであり、それを体現したのは草木をまとった参加者と、植物を纏い砂浜から海への舞を捧げた舞踊家の李美喜氏及びI am flower projectの音楽担当メンバーであった。このワークショップにより、福島県の西端で生まれた「草木を纏う」という行為がアーティストを介して東端にまで伝わったという事実は、二つの離れた地域の人々が自然とのコミュニケーションをする上で、共通言語を得たとも解釈できる。このような原初的ながらも新しい共通体験こそが、状況も環境も違う広い福島の未来を共に考えていく上で重要なファクターとなることを示唆するワークショップであった。



片桐 功敦

大阪生まれ。華道家。
1998年大阪府堺市の花道みささぎ流家元を襲名。2001年より現在に至るまで毎春、桜一色のいけばな作品を発表。
2011年桜シリーズの集大成として佐川美術館で桜数万本を生けあげた作品を展示。いけばなの作品制作に伴い花の命についての執筆・掲載も多数。いけばなが源流として持つ「アニミズム」的な側面を掘り下げ、花を通してひとときの空間を生み出すことに一貫して取り組んでいる。

開催日　2015.10.25

参加者数　２５名　　**関係者延数**　５０名

アーティスト　片桐功敦（華道家）、白玉亮次（写真家）、李 美喜（舞踊家）

主催　海と山の結婚式実行委員会　　**共催**　南相馬市博物館、みささぎ会
協力　特定非営利法人みんな共和国、I am flower project、特定非営利法人Wunder ground、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会



三島

三島エリアコーディネーター

三澤 真也
Shinya Misawa

森のはこ舟アートプロジェクトの三エリアのうち、人口1,600人あまりと町の規模が最も小さい三島町。古来の知恵が息づく森の町にアートが生み出した「飛び火」について、三澤さんに話を伺いました。

アートの通じない町で、アーティストを受け入れる

――まずは三澤さんのプロジェクトへの関わりから教えて下さい。

「三島に移り住んだのが５年くらい前で、森のはこ舟には初年度からエリアコーディネーターとして関わっています。何しろアートが通じないような土地ですから、地域とアーティストの接点づくりからです。初年度からプロジェクト型で５人を受け入れたわけですが、正直実際には５×２くらいの仕事量。アーティストも住民も『ここで何やるの？』って感じでしたからね。とにかく最初は人と会ってリサーチして、それぞれの集落を巡って話を聞いて、何となくここととここでこんなことができないかな、という形が少しずつ見えてくる、そんなイメージですね。大事なのは、上から押しつけないということ。地域の人たちが何をやりたいのかという意向を汲み取って、その上で「アートを通してお手伝いできることはありませんか？」という立ち位置から、皆さんと接していくことを心がけてきました。出てきたものがアートなのか何なのか、正直よくわからなくなることもありますが、今のところアートと言っていいものができあがったと思っています」

――三島は、周囲の環境から言っても、まさに会津の森の文化が色濃く残るところですね。三澤さんは、どんなところに三島の魅力を感じますか？

「三島について語るときに思い出す風景があるんです。５年くらい前に初めてやってきたときに、たまたま町の方とすれ違ったんですが、その方が笠と蓑をかぶっていたんです。こんな地域がまだ日本にあったのかと、あの時は本当に驚きました。博物館の方に聞くと、笠や蓑を今も実用しているのは奥会津くらいしかないんだそうです。つまり、歴史の中で培われた森の生活文化や自給自足の暮らし、森に対する眼差しが今も息づいているということです。会津の中でも豪雪地帯ですし、その豊かさというのは、もしかしたら厳しさと裏腹のものなのかもしれません」

次に「飛び火」するかを見なければ、成否は判断できない

――今年度印象的だったプログラムを教えて下さい。

「印象的だったのは、西会津と共同で行った『幻のレストラン』という企画ですね。EAT & ART TARO さんという方のプロジェクトです。彼は食をテーマにした作品を作るアーティストなんですけど、一番おいしくおにぎりを食べられるシチュエーションを作ろうといって、そのためだけに週末運動会を開いちゃうような作家です。つまりそこに生まれる“場”そのものを作品とするんですね。場といっても会場作成で終わりではない。そこに集まってくる人がどうその空間を楽しみ、最後にどのような場になったのかを見届けないと、そのプロジェクトが本当にアートになっているのかわからないんです。その意味で、『幻のレストラン』が終わった後の打ち上げはとても印象的でした。住民の中に固まっていたものが氷解して、本当に仲良くなれた気がしましたね。その雰囲気ができてくると『次に何かやろう』という気持ちになれる。私は、そういう『次に飛び火するかどうか』が、プロジェクトの成果だと思います。だから打ち上げになってみないとわからないということなんです」

――その飛び火によって生まれた熱がネットワークを作り出す原動力になっているのかもしれませんね。今年、三島にはどんなネットワークが新たに生まれましたか？

「ライトアートのアーティストで、筑波大学の先生もやられている逢坂卓郎さんとのプロジェクトでは、１年目から筑波大の先生や学生さんが来てくれました。さらに今年は、自動車メーカーの日産の方が入ってきてくれて、日産の電気自動車を借りることができ、その電気自動車のバッテリーに会津若松の風力発電のエネルギーを蓄電して、集落の周りの杉林をライトアップするという企画ができました。学生、学校、そして自治体に企業と、様々なネットワークが生まれてきています。三島町の人口はこのまま何も策を講じなければ、３０年後には５００人くらいになってしまうんじゃないかという試算があるんですね。つまり、自力で何とかするという段階ではない。周りの力を借りながらやらなければならない。新しいコミュニティの姿を描いていかないと存続できないということです。会津では震災後から自然エネルギーの動きが活発になっていますが、三島町だからこそできる『自然エネルギーに拠った暮らし』というものも、おぼろげですが見え始めているような気がします。アートを突破口として、ネットワークやライフスタイル、コミュニティにまで可能性を広げていきたいと思っています」



『幻のレストラン』での料理開発風景

三澤 真也 Shinya Misawa

1979年、長野県生まれ。
長野県立諏訪清陵高校卒、武蔵野美術大学造形表現学部映像学科卒。大学卒業後２０代は絵画、映像、パフォーマンスを中心にアート活動を展開。国内外でパフォーマンスアートフェスティバルに多数参加。アート活動の傍ら２年ほど国内外を放浪。その後飛騨高山にある「森林たくみ塾」にて２年間の木工修行を経て、三島町生活工芸館の木工指導員として勤務。現在同三島町にあるNPOわくわく奥会津.COMに勤務しながら、復興アートプロジェクト「森のはこ舟アートプロジェクト」に三島町エリアコーディネーターとして参加。

森光水 ~ Natural Energy Valley MISHIMA ~





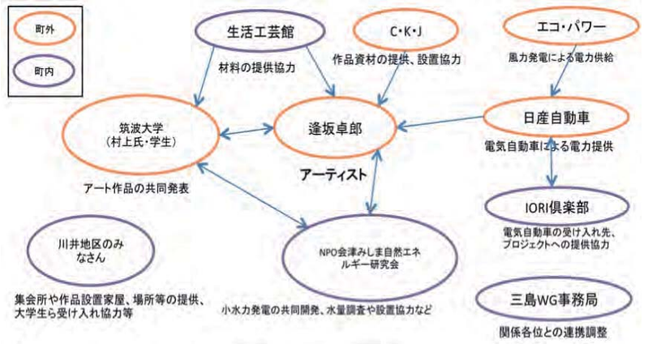
プログラム概要

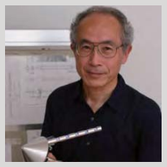
昨年度からの継続事業である本プロジェクトは、町内の集落（本年度は川井地区）をフィールドとし、風土に即した再生可能エネルギーを用いてライトアート展覧会を開催するプロジェクトである。ライトアップに必要な電力は、町内にて自然エネルギーの利活用に取り組む「NPO 会津みしま自然エネルギー研究会」が制作した小水力発電の水車やロケットストーブに筑波大学が開発した蓄電システムを掛け合わせることによって自給している。ライトアート作品は、筑波大学芸術学系助教・村上史明氏の授業を履修した学生１８名によって制作された。また今年度は学生たちの作品に加えて、日産電気自動車（株）や、エコ・パワー株式会社（風力発電会社）といった外部組織の協力も得られたため、川井地区周囲の杉林も逢坂氏の演出によってライトアップさせることができた。

地域への影響など

新しいエネルギーの在り方を、福島から発信する本プロジェクトへの注目度は高く、本年度は昨年度以上のメディア取材を受けた。このプロジェクトが継続されることにより三島町への関心が高まり交流人口の増加が期待される。また、過疎高齢化が進み、このまま策を講じなければ２５年後には人口が約６００人に減少するといった推計がある三島町において、もはや内部の力だけでは町の暮らしを維持することが難しいと言わざるを得ない。このプロジェクトが筑波大学や日産自動車（株）といった大学や大手企業が町内に入ってくれる良いきっかけとなっており、こういった繋がりを通じて今後はアートプロジェクトに留まらず、町の未来を繋いでいく関係性を作っていくことも期待している。

相関図





逢坂 卓郎

東京都生まれ。アーティスト。
日本のライトアートの草分け的存在。宇宙線の信号がLEDの光に変換される“宇宙線シリーズ”、2000年の皆既月食時に棚田に設置された18個の巨大な鏡が月光を捕らえる“ルナ-プロジェクト”は宇宙をテーマとした代表的な作品。2008、09、11年に国際宇宙ステーション内で芸術実験を実施。国内とヨーロッパの主な美術館で展覧会を開催。現在、筑波大学芸術系特命教授。

プロジェクトスケジュール

川井地区説明会　１２名　（2015.9.28 ～ 29）
１回目リサーチ　３２名　（2015.10.11 ～ 12）
２回目プレゼン　３５名　（2015.12.12 ～ 13）
３回目展示準備　４０名　（2016.2.5 ～ 7）

参加者数　２１９人以上

メディア掲載情報

福島中央テレビ（ゴジてれ Chu!）、福島民報、福島民友、読売新聞社、河北新報社

「オフグリッドの未来へ～アートが問いかける福島の再生可能エネルギー～」展




プログラム概要

2015 年 12 月に福島市にオープンしたギャラリー・オフグリッド。そのコンセプトは「グリッド（送電網）に頼らず、奪われず。自立する福島を芸術と文化から目指すギャラリー」。その記念すべき第 1 回目のオープニングを昨年度、森のはこ舟アートプロジェクト・三島エリアで開催した、自然エネルギーのみを利用したライトアート展覧会「森光水」の様子を展示することで飾った。またオープニングイベントとして逢坂卓郎（『森光水』参加作家）、赤坂憲雄（ギャラリー・オフグリッド運営委員会委員長）、佐藤理夫（福島大学教授）によるトークイベントも開催された。

地域への影響など

福島県の中でも山深い奥会津に位置する三島町で開催されている『森光水』の展覧会は２年目に入り、昨年度に引き続き筑波大学の多大なる協力の他、日産自動車（株）やエコ・パワー株式会社（風力発電会社）といった外部からの協力も得られ広がりを見せているが、山間部ということで外部への情報発信力が不十分だった。本展覧会を実施したことによって複数のマスメディアに掲載された他、ラジオでの放送など幅広く本プロジェクトのことを周知することができ、その結果今年度の集客に繋がった。またトークイベントを通して、マスメディアや外部の方々にこのプロジェクトの意義や理解を深めてもらうこともできた。

開催日　2015 . 12 . 11 ～ 2016 . 1 . 29

アーティスト　逢坂 卓郎

参加者数　３００名

メディア掲載情報　福島民友、福島民報、ラジオ福島、テレビ局２社、ラジオ局１社

主催　ギャラリー・オフグリッド運営委員会

協力　逢坂 卓郎×筑波大学村上史明研究室、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会

地芝居をつくろう ・ Ⅱ









プログラム概要

昨年度の平田オリザ氏による演劇プロジェクトに引き続き、青年団（平田オリザ主宰）の若手演出家２名による演劇ワークショップを三島町中学校（全学年全生徒 30 名）と三島町小学校（小学６年生 11 名）の生徒を対象に３日間に渡ってそれぞれ実施した。このプログラムは演劇のワークショップを通して、子供たちのコミュニケーション能力を高めたり、自己表現の稼働領域を少しずつ広げていくことを目的としたワークショップとなっている。

地域への影響など

山間部で過疎高齢化の進む三島町の子供たちは、幼少期から限られた人数で固定化された人間関係を強いられている。そのため力関係も固定化し、個々が上手く自己主張・表現が出来ない実状がある。従って、三島町のような山間部の子供たちが義務教育を終えて、高校や社会といったより大きなコミュニティの中へ入ったときに、上手く社会に適応できないことが長年の課題である。そのような中、本プロジェクトを通じて、普段は大人しい山間部の生徒たちも少しずつ恥ずかしさを乗り越えて表現の幅を広げていき、最終的にはそれぞれの個性を生かした即興の小演劇を自主的に制作するところまで行くことが出来た。中には普段は目立たないのに、演技の意外な才能を発揮する生徒も現れ、固定化された人間関係に一石投じる結果となった。このような取り組みを続けることにより、山間部の子供たちが社会へ出たときにも物怖じせずに社会に適応していく能力を身につけることができると実感した。



舘 そらみ

神奈川県生まれ、トルコとコスタリカで育つ。劇作家／演出家／俳優／ガレキの太鼓主宰。慶應義塾大学法学部卒。「この瞬間に生きているということ」をテーマに活動を行い、その作風は朝日新聞に“徹底して無責任で利那的”と評される。マンション等の住居で行う公演や観客参加型演劇といった、多様な演劇的アプローチを行っている。また近年では映像分野にも進出し、映画の脚本も手掛ける。コミュニケーション教育に主眼をおいたワークショップを全国各地で行っている。劇団青年団演出部所属。ガレキの太鼓劇団サイトhttp://garekinotaiko.com/



田上 豊

劇作家／演出家／田上パル主宰。熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。在学中に劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、疾風怒濤の勢いと、遊び心満載の舞台は「体育会系演劇」とも評される。劇団外でも、高校生、大学生とのクリエーション、市民劇団や公共ホール事業への書き下ろしなど、プロアマ問わず、様々な形で活動を展開。大学在学中にワークショップデザインに触れ、その後、創作型から体験型、育成講座まで幅広くワークショップを全国各地で行う。現在、富士見市民文化会館キラリふじみアソシエイトアーティスト、財団法人地域創造登録アーティスト、劇団青年団演出部所属。田上パル劇団サイトhttp://www.tanouepal.com

プロジェクトスケジュール

舘そらみ 演劇プロジェクト　2015 . 10 . 7 ～ 9　　田上豊 演劇プロジェクト　2015 . 10.28 ～ 30

参加者数　１５０人

『私たちのハァハァ』上映会 & 舘そらみトークイベント





プログラム概要

本プロジェクトは、今年度の三島エリアプログラムである『地芝居をつくろう・Ⅱ　舘そらみ演劇プロジェクト』から派生したイベントである。本イベントでは舘そらみ氏が脚本を手掛けて全国上映された映画『私たちのハァハァ』の上映と舘氏をお招きして、映画にまつわるエピソードや脚本家の仕事に迫るトークイベントを三島エリアコーディネーターと対談する形で開催した。

地域への影響など

映画を上映した直後のトークイベントということもあり、脚本を手掛けた舘氏ご本人から直接、脚本を書くに当たってどんな苦労やエピソードがあったのかを臨場感をもってお話頂くことができた。また三島町のような山間部でプロの脚本家の話を聞く機会は少ないため、脚本家がどんな仕事をしているのかを詳しく伺えたことは来場者にとって良い刺激となった。実際、会津管内の高校演劇部の学生も来場、「プロの言葉を生で聞くことができるなんてめったにない、とても良い機会になった」というコメントをもらった。高校生からの質疑応答も活発に行われた。こういった機会をたくさん創出していくことにより、山間部の子供たちに未来の選択肢を増やしていくことが期待できる。

開催日　2016 . 2 . 28

アーティスト　舘 そらみ

参加者数　６０名

主催　三島町教育委員会

協力　森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会、三島町交流センター山びこ

西会津×三島エリアプログラム

幻のレストラン





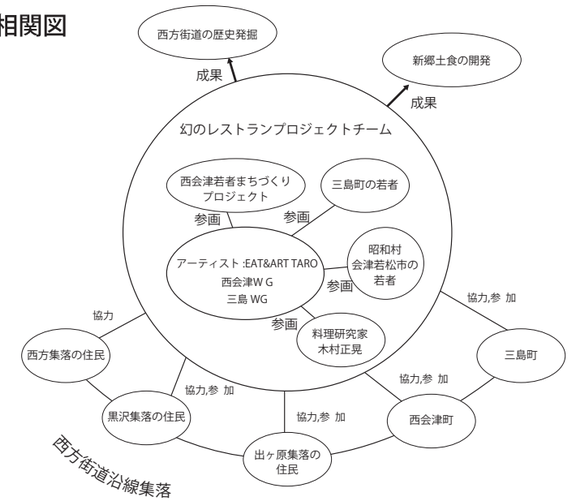
プログラム概要

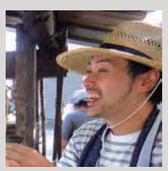
かつて塩の道として栄えた三島町と西会津町を結ぶ西方街道をテーマに１日限りの幻のレストランをオープンさせたプロジェクト。このプロジェクトは、アーティスト EAT & ART TARO 氏の呼び掛けによって集められた西会津町と三島町を中心とした若者およそ３０名によって進められた。プロジェクトメンバーは１年に渡って西方街道の歴史や食文化といった地域資源のリサーチを重ねた。そしてそのリサーチを通して見えて来た郷土料理の背景や、地域活性化に繋がる新たな可能性を『幻のレストラン』のなかで来場者に創作料理として提供したり、プレゼンテーションすることによって示した。

地域への影響など

参加メンバーにとっては、これまで敷居が高いイメージであった地域の歴史や文化についての興味関心が高まるきっかけとなり、同時に地域への誇りや愛着というものが生まれつつある。また、地域を理解する視点の多様さや、調べた結果をどう他者へ伝えるかというプレゼンテーションの新しいスタイルとして、参加メンバーもレストラン出席者も大いに今後の可能性を実感することができたようだ。食文化の視点から山の暮らしを再認識できたということは言うまでもないが、それ以上に、このプロジェクトにおいて生まれた「出会い」というものが、今後のこの地域にとって最も大きな財産となるであろうことが、多数の関係者の感じ取っている最大の成果ではないだろうか。

相関図





EAT & ART TARO

神奈川県生まれ。アーティスト。
食を楽しみ、発見する「場」の創作や「仕組み」を生み出すアート活動を展開。これまでの主な活動に、2009年墨田/墨東まち見世「向島缶詰アーカイブ」、2012年、新潟県／越後妻有トリエンナーレ「越後妻有フード記」、2013年、香川県／瀬戸内国際芸術祭「島スープ」、2014年千葉県／中房総国際芸術祭市原アート×ミックス「おにぎりのための、毎週運動会」など。
現在、全国各地でプロジェクト進行中。



木村 正晃

新潟県生まれ。料理研究家。食の翻訳家。
新潟県初の野菜ソムリエ、フード＆アグリフォトグラファー。日本大学農獣医学部卒。2007年、「にいがた野菜ソムリエコミュニティ」設立、代表就任。食料自給率１％アップ運動「Food Action Nippon」応援団、福島応援シェフ。近年は、食の翻訳家と称し、料理の味と色彩の視覚的要素の関係性、素材と生産環境など、食する行為に含まれた情報を言葉や写真で伝える活動を行っている。





西方街道ウォーキングリサーチ（１０月２４日実施）

秋晴れの広がる 10 月下旬、18 人のプロジェクトメンバーによって全長およそ 13km に渡る西方街道（現国道 400 号）を実際に歩いてみるリサーチを実施した。車が普及する以前、三島町と西会津町の間には西方街道を歩いて頻繁な往来があった。実際に歩いてみることによって西方街道の距離を身体感覚として共有することができた。また車の移動では見落としてしまう石碑や観音堂、風景といった地域資源を発見することが出来た。出会った地域の方々からお話





料理開発（11 月 21 日実施）

幻のレストランでは郷土料理と併せて、料理家・木村正晃さんによる創作料理も提供された。木村さんのレシピは「こづゆチラシ寿司」、「えご出汁櫃塗し（ひつまぶし）」、「えごねりスイーツ」の３品で、いずれも西方街道を行き来していた「海」から来た食材（えご草、スルメ、ニシン、干し貝など）と、「山」の食材からなる郷土料理をアレンジする手法で創作された。また 11 月 21 日にはスタッフ向けの事前料理教室も開催された。





えごリサーチ（11 月 20 日実施）

昔から西会津や三島町に伝わる「えごねり」という郷土料理。原材料は佐渡島や粟島から運ばれる「えご草」という海草から出来ている。本プロジェクトでは、この「えごねり」が三島町を横断する只見川を挟んで食べる地域、食べない地域に分かれることから、その不思議な分布を解き明かすべく今年度の中心的なリサーチ対象とした。産地である粟島の方々や西会津、三島町での聞き取り調査の他、実際に西会津の方から「えごねり」の作り方を教わった。





ひしお漬けリサーチ（12 月 5 日実施）

西方地区の青木麹屋さんが作る麦麹を使って作られる「ひしお漬け」または「鉈漬け」とも呼ばれる漬け物。作る地域がとても限定的で、また近年では作る人も少なくなって来ていることもあり、その作り方は謎に包まれていた。今年度プロジェクトメンバーは青木麹屋さんから、この「ひしお漬け」の作り方を教わり、実際に自分たちで作ってみるリサーチを実施した。作ったひしお漬けはレストランで来場者にも提供された。

プロジェクトスケジュールと延べ人数

２０１５.６.１７	小柴七治氏ヒアリングリサーチ	１４名
６.１８	野沢ウォーキングリサーチ	６名
７.４	ピザパーティー　at ロータスイン 三島×西会津メンバー顔合わせ（西会津）	２５名
７.１９	①コンセプトシェア & 顔合わせ & 交流会　（at グリーン奥川：西会津）	２０名
８.２２	越後妻有トリエンナーレ視察研修	２０名
８.２３	EAT&Taro さんに会おう！旅行	
１０.２４	②ウォーキングリサーチ &BBQ 交流会　（at 森の校舎カタクリ：三島）	１８名
１１.２０	えご作りリサーチ　（at 西会津奥川）	８名
１１.２１	木村正晃さん郷土料理　＋　郷土料理アレンジ WS　（at 西会津芸術村：西会津）	２０名
１２.５	ひしお漬けリサーチ　（at 西方 & 芸術村）	１５名
２０１６.１.３０	幻のレストランイベント当日　（at 西会津芸術村：西会津）	５０名

メディア掲載情報

KFB 福島放送（ふくしまスーパーＪチャンネル）、福島民友

猪苗代エリアプログラム

氷の動物園をつくろう！





プログラム概要

猪苗代の東岸で冬の時期に生みだされる氷の造形「しぶき氷」。そこから「氷の動物園」を作る着想を得たアーティスト・木村崇人氏ともに、しぶき氷の発生する原理や材料に関する調査を実施。猪苗代の地形が生み出す冷たい風と、風による湖のしぶきが発生の要因であることから、散水装置を作ることで人工的にその環境をつくる方法を考案した。プログラムとしてはプロジェクト初年度ということもあり、木村氏の活動紹介と構想を伝えるトークイベントと氷の動物園を作るための方法を考えるワークショップを開催。子供たちを中心に、スケッチや氷のつきやすい造形を考えた。

地域への影響など

猪苗代の冬の景勝とされている「しぶき氷」。冬の時期に観に行くためには、現地までの雪道や湖岸の整備が必要で、それは地元有志の努力によって維持されてきた。本プロジェクトは人工的に氷がつく環境を作り上げることで、猪苗代の自然や土地の力を知るとともに、「しぶき氷」への関心を高めることにつなげる。本年度は、ワークショップ開催時に気温が高かったため氷を実際に発生させることはできず、自然相手の難しさを参加者とともに感じることができた。また、聞き取り調査をした地元の方達からは、冬を楽しむ企画への関心の高さが感じられ、猪苗代に伝わる民話や雪から庭木を守る雪吊り、雪囲いなど積極的なアイデア提供があるなどプロジェクトへの期待が高まっている。



木村 崇人

愛知県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科博士課程修了。1998年から「地球と遊ぶ」をテーマに作品を制作。目に見えない地球の力を視覚化し、実際に体で感じる事ができる体験型作品を中心に展開している。ワークショップも国内外で数多く発表。代表作には、木もれ陽の形を様々な形に変える『木もれ陽プロジェクト』、光の特性を利用して作家自身が歩いて感じた森を表現した『森シリーズ』、目の位置を変える事で、巨人の視覚を体験することができる『ガリバーシリーズ』、風見鳥を群生させて風の姿を知覚することができる『風見鳥シリーズ』などがある。2004年より『地球と遊ぶプロジェクト』代表。

開催日　2016.2.18～2.29

参加者数　３０名　　**関係者延数**　１０名

メディア掲載情報　福島民報、福島民友、読売新聞社

北塩原エリアプログラム

写真展『森を感じる　～写真家・林明輝が訪ねた日本の森～』





プログラム概要

北塩原村生涯学習センターにて、写真家林明輝氏の写真展『森を感じる～写真家・林明輝が訪ねた日本の森』を開催した。写真展には裏磐梯に連なる森を背後に控えた山里の元小学校教室の展示室が使用され、全国の森・自然にインスピレーションを得た林さんの 50 数点の写真は、見る者に「あたたかさ」「明るさ」「厳しさ」「暗さ」「畏れ」など様々な反応を巻き起こし、周りの風景とともに森に浸り、森を考えるひとときとなった。

地域への影響など

来場者が 700 人と、非常に多くの方に見ていただいた。来場された方からは、「森を再発見したようだ」「ありのままの美を感じることができた」などと感動の声をたくさんいただくことができた。写真展会場の大塩集落は森に囲まれた場所であり、訪れた方にとってより身近に森を感じる一助となったと考える。次年度には、北塩原村における森と人との付き合いの歴史の一端を知ることを目的に、早稲沢集落、桧原集落などで営まれた木地師の生業活動を調査する予定となっている。こうして「森」をテーマに地域をつなげ、地域の魅力を発信する機会を増やしていくことも成果であると考える。



林　明輝

神奈川県生まれ。デジタルカメラを駆使し、列島各地の自然風景を撮影。自然風景の微妙な空気感、透明感を表現した作品を数多く発表する。現在、只見町で定期的に撮影を行っている。主な写真集：森の瞬間』(小学館)、『四季の宝物』(日本写真企画)、『自然首都～福島県只見町の四季～』(平凡社)

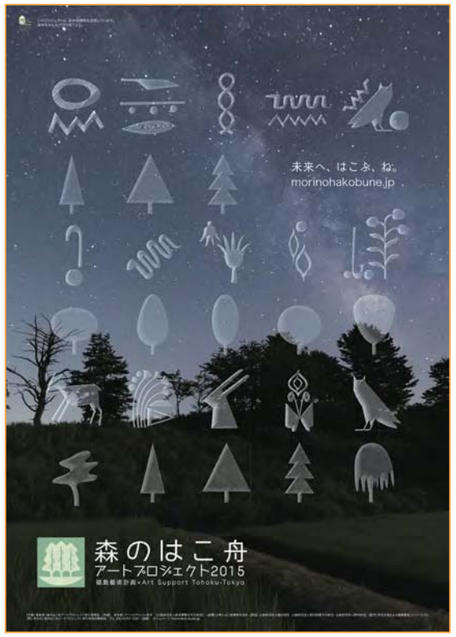
開催日　2015.10.18～11.15

参加者数　７００名　　**関係者延数**　１０名

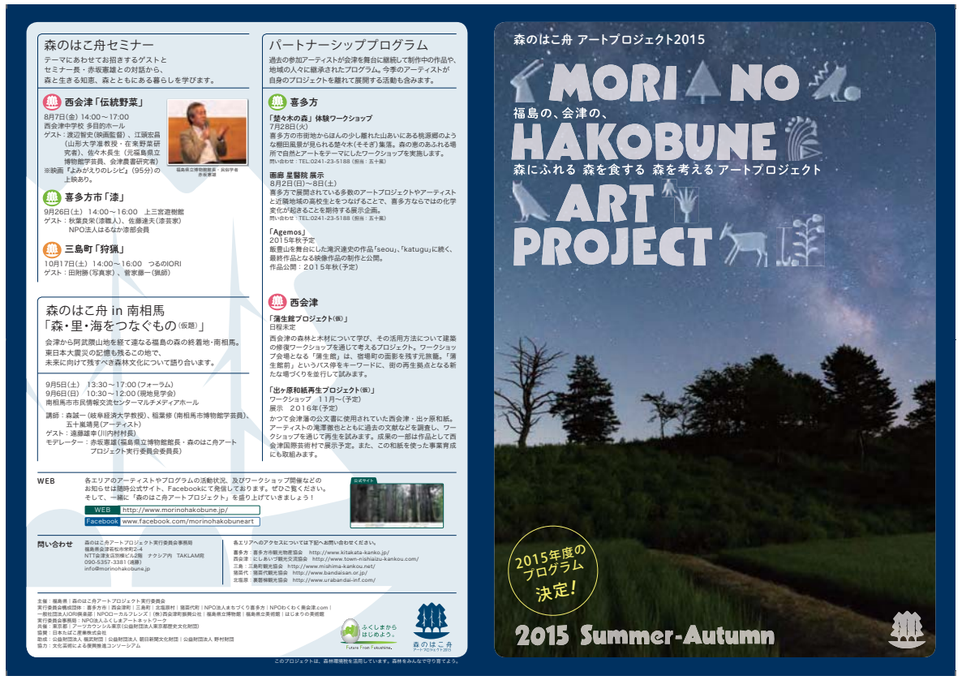
メディア掲載情報　福島民報、福島民友、NHK 福島放送

資　料

the documents related



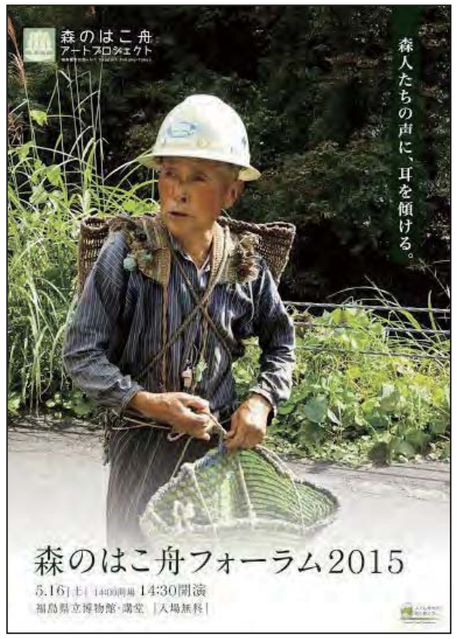
森のはこ舟アートプロジェクト 2015
（ポスター）





森のはこ舟アートプロジェクト 2015
（プログラム案内 / 夏～秋）

（表）



（裏）



『森のはこ舟フォーラム 2015』

（表）



（裏）



『森のはこ舟セミナー』

（表）



（裏）



『森のはこ舟フォーラム in 南相馬
～ つなみがおしえてくれたこと～』

（表）



（裏）



喜多方エリア活動報告展示
『高郷プロジェクト』　『楚々木樂舎 第二章』



『画廊星医院展示』



『楚々木の森 体験ワークショップ』

（表）



（裏）



『楚々木こども市 2015』





『楚々木樂舎瓦版』

（表）



（裏）



森のはこ舟アートプロジェクト 2015
（プログラム案内 / 冬）



『森をえがく ～植物を介したアートコミュニケーションの実践～』



『出ヶ原和紙再生プロジェクト』

（表）



（裏）



『森をえがく ～植物を介したアートコミュニケーションの実践～』成果展

（表）



（裏）



『草木をまとって山のかみさま』

（表）



（裏）



『海と山の結婚式 ～草木をまとって自然を祝福しよう～』

（表）

森のはこ舟アートプロジェクト
開催趣旨

四季折々に豊かな表情を見せる森は、多くのめぐみを与えてくれる命の泉です。 森は、山、里、海、そして人の心の豊かさを生み育ててきました。

人々は、森から糧を得、器を家を造ってきました。 森は、恐れ崇める場であり、安らぎの場でもありました。

浜辺の松林、里山の広葉樹林、奥羽山脈のブナ林。はま、なか、あいづの森が県土の７割を占める福島は、森のくにです。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により、福島県は大きく傷つけられました。大量の放射性物質が拡散し、多くの人々はふるさとを離れ、今も将来への不安を抱えながら暮らしています。

私たちは、福島再生のために、美しい自然と人々が愛しみ育ててきた豊かな森林文化をテーマとした新たなアートプロジェクトを展開し、未来へ希望を発信するとともに未来に向かう福島のイメージの創造を目指します。

御挨拶

第二回「森のはこ舟　森・光・水」展では、三島町川井地区の雪原に筑波大学学生が参加し、地域の美しい生態や農耕、伝承をテーマとした光の作品を展開します。作品は会津三島自然エネルギー研究会による水力発電とEVに蓄電された風の自然電力により里山に光景観を投げかけます。緩やかに変化する神秘的な光と闇の空間を回遊し楽しんでいただければと思います。

筑波大学特命教授　逢坂卓郎

この展覧会では、マイクロ水力発電とストーブの熱電発電による自然エネルギーのみを使用した光の作品を展示しています。専用のシステムによって、日中に充電された電力を夜間に利用し、わずかな電力を最大限に利用した光の演出が行われています。高輝度LEDによる光の演出を18名の大学生が考案し、三島町の方々との協働作業によって展覧会を実現することができました。学生達の柔軟な発想による光の作品をご高覧いただきたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

筑波大学芸術系　村上史明

主催
森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会
逢坂卓郎＋筑波大学CR＋芸術系村上史明研究室
NPO法人会津みしま自然エネルギー研究会
三島町教育委員会

協力
日産自動車株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
エコ・パワー株式会社（会津若松ウィンドファーム）
一般社団法人JORI倶楽部
三島町生活工芸館

編集：逢坂卓郎　村上史明　別城祐志　石田結香

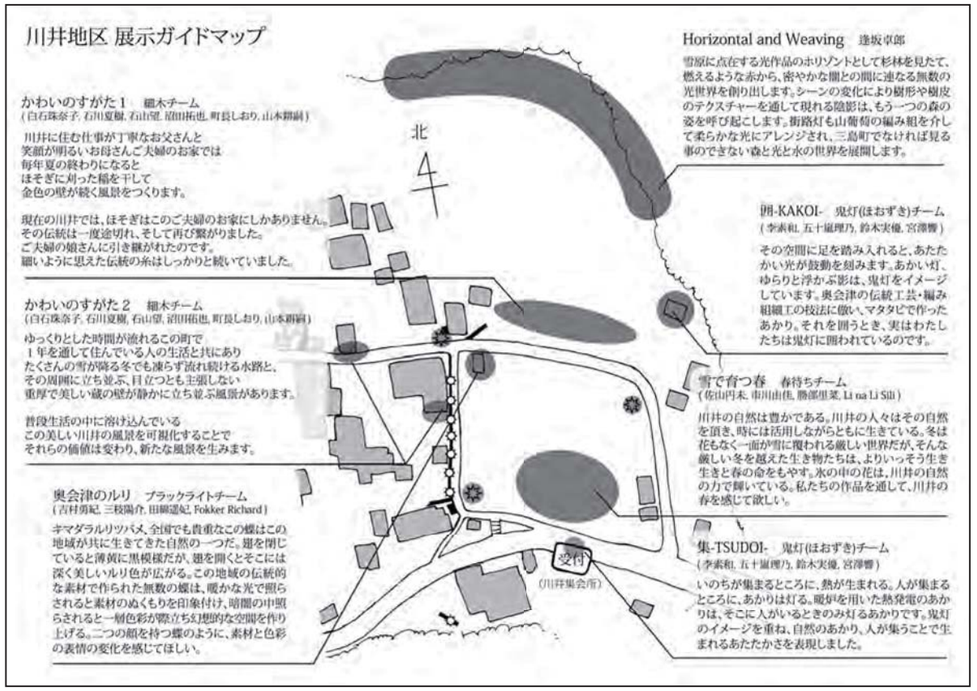
森のはこ舟アートプロジェクト2015
森　光　水
Natural Energy Valley MISHIMA

会期
２０１６年２月８日 (月) ～２月１４日 (日)
１７：３０～２０：３０

会場
三島町川井地区

（裏）

川井地区 展示ガイドマップ



かわいのすがた１　細木チーム
（白石珠奈子, 石川夏樹, 石山望, 沼田拓也, 町長しおり, 山本舞嗣）

川井に住む仕事が丁寧なお父さんと
笑顔が明るいお母さんご夫婦のお家では
毎年夏の終わりになると
ほそぎに刈った稲を干して
金色の壁が続く風景をつくります。

現在の川井では、ほそぎはこのご夫婦のお家にしかありません。
その伝統は一度途切れ、そして再び繋がりました。
ご夫婦の娘さんに引き継がれたのです。
細いように思えた伝統の糸はしっかりと続いていました。

かわいのすがた２　細木チーム
（白石珠奈子, 石川夏樹, 石山望, 沼田拓也, 町長しおり, 山本舞嗣）

ゆっくりとした時間が流れるこの町で
１年を通して住んでいる人の生活と共にあり
たくさんの雪が降る冬でも凍らず流れ続ける水路と、
その周囲に立ち並ぶ、目立つとも主張しない
重厚で美しい蔵の壁が静かに立ち並ぶ風景があります。

普段生活の中に溶け込んでいる
この美しい川井の風景を可視化することで
それらの価値は変わり、新たな風景を生みます。

奥会津のルリ　ブラックライトチーム
（吉村勇紀, 三枝陽介, 田畑遥紀, Fokker Richard）

キマダラルリツバメ、全国でも貴重なこの蝶はこの地域が共に生きてきた自然の一つだ。翅を閉じていると薄黄に黒模様だが、翅を開くとそこには深く美しいルリ色が広がる。この地域の伝統的な素材で作られた無数の蝶は、暖かな光で照らされると素材のぬくもりを印象付け、暗闇の中照らされると一層色彩が際立ち幻想的な空間を作り上げる。二つの顔を持つ蝶のように、素材と色彩の表情の変化を感じてほしい。

Horizontal and Weaving　逢坂卓郎

雪原に点在する光作品のホリゾントとして杉林を見たて、燃えるような赤から、密やかな闇との間に連なる無数の光世界を創り出します。シーンの変化により樹形や樹皮のテクスチャーを通して現れる陰影は、もう一つの森の姿を呼び起こします。街路灯も山葡萄の編み組を介して柔らかな光にアレンジされ、三島町でなければ見る事のできない森と光と水の世界を展開します。

囲-KAKOI-　鬼灯(ほおずき)チーム
（李素和, 五十嵐理乃, 鈴木実優, 宮澤響）

その空間に足を踏み入れると、あたたかい光が鼓動を刻みます。あかい灯、ゆらりと浮かぶ影は、鬼灯をイメージしています。奥会津の伝統工芸・編み組織工の技法に倣い、マタタビで作ったあかり。それを囲うとき、実はわたしたちは鬼灯に囲われているのです。

雪で育つ春　春待ちチーム
（佐山円未, 市川由佳, 勝部里菜, Li na Li Siii）

川井の自然は豊かである。川井の人々はその自然を誇き、時には活用しながらともに生きている。冬は花もなく一面が雪に覆われる厳しい世界だが、そんな厳しい冬を越えた生き物たちは、よりいっそう生き生きと春の命をもやす。氷の中の花は、川井の自然の力で輝いている。私たちの作品を通して、川井の春を感じて欲しい。

集-TSUDOI-　鬼灯(ほおずき)チーム
（李素和, 五十嵐理乃, 鈴木実優, 宮澤響）

いのちが集まるところに、熱が生まれる。人が集まるところに、あかりは灯る。暖炉を用いた熱発電のあかりは、そこに人がいるときのみ灯るあかりです。鬼灯のイメージを重ね、自然のあかり、人が集うことで生まれるあたたかさを表現しました。

『森光水 ~ Natural Energy Valley MISHIMA ~』展示ガイドマップ

（表）



（裏）



『私たちのハァハァ』上映会 & 舘そらみトークイベント

（表）



（裏）

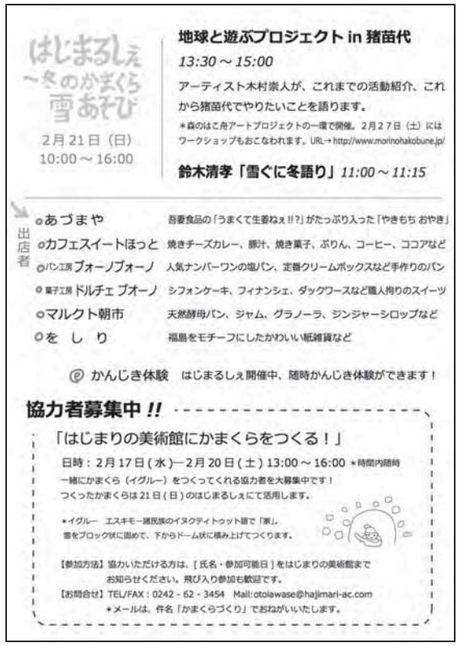


『まぼろしんぶん』

（表）



（裏）



『氷の動物園をつくろう！』



『写真展「森を感じる ~ 写真家・林明輝が訪ねた日本の森 ~」』

アンケート

『森のはこ舟フォーラム 2015』

第１部の感想

●「アート」というまいち見えない題材と真っ向から取り組み、自分でもわからない事に問いかけ、形にしていくという大きな事業を作り上げていく姿勢を強く感じました」（６９歳 / 女性）
●西会津地区で参加したプログラムがいくつかあり、楽しく思い出しました。他のエリアの発表から、目的やスコープも様々で、地域・交流・経済といろいろな背景が垣間見えてたのしかった（５１歳 / 男性）
●決して市街地とは言えない各々の地域で、地元の皆様（しかも外者を受け入れない会津人の）と少しずつ少しずつ近づき、信頼・絆を築き上げてきたことに感銘を受けました（３０歳 / 女性）
●県外の若人が、集落の共同作業に参加していただきまして、ほんとうに感謝に耐えません。ありがとうございます（９３歳 / 男性）
●伝統文化を継承できるプロジェクトに魅力を感じた（５０歳 / 女性）
●地元に住んでいれば当たり前のことを、当たり前に継承できていない現代。主に外部の人が入ることにより、開拓されている？感想を持ちました。非常に素晴らしい事業だと思います（４５歳 / 女性）
●それぞれの地域で多用な活動がされていて興味深かった。三澤さんの報告の「未来への宝物」という言葉が印象に残った（４７歳 / 男性）
●それぞれの地域の違いがあっておもしろい（３２歳 / 男性）
●アートは地域の生活を豊かにするエッセンスなのだと感じた。いろいろな要素が混ざって、今後より豊かなプロジェクトになることを期待します（性別年齢不明）
●それぞれの活動報告から、アート活動をする以前に、人間と人間の信頼関係であったり、自分をさらけ出す勇気が第一歩につながることをひしひしと感じてとても感動した（１９歳 / 女性）
●地区ごとの説明は地区ごとの特色が出ていて、面白く聞きました。その中で、参加した西会津の報告は思い出すことも多く、楽しいイベントを背景を知ることは（アートとは？と問うこと）は特に面白かったです（４７歳 / 女性）
●事業の内容の説明がよかった（76 歳 / 男性）
●詳しく説明があり理解できた。若人が元気で良い（75 歳 / 男性）

第２部の感想

●アート活動によって、当たり前であったことが特別なことであると気付かされたりするという、素敵な言葉を聞き、自分の制作する上でのパワーをもらいました（１９歳 / 女性）
●森人が来ると思っていましたが、第一部と同じメンバーでがっかり（男性）
●アートのもつ意義が深められて考えさせられた。新たな時代へのヒントを得た想い（４７歳 / 男性）
●個人的に会津が大好きなので、奥が深すぎる皆さんのお話、感動しました（４５歳 / 女性）
●もっと登壇者の話をききたいと想いました（５０歳 / 女性）
●館長の話が印象的でした。「道・橋」の話はとてもはっきりと実感します（４１歳 / 女性）
●自然から森から食をわけてもらっている生活を改めてありがたく思います（６９歳 / 女性）
●第二部を聞いたことで第一部の地区の報告がより深く理解できました（４７歳 / 女性）
●森を育て、そこから生産できる資源を活用する）（76 歳 / 男性）
●赤坂館長の話、よくわかった（75 歳 / 男性）

今後「はこ舟」に期待すること

●森と人とをつなぎながら、これからの社会に浸透させていことが、もっと大きな輪になって広がってほしいと思います（６９歳 / 女性）
●これをずっと続けて欲しい。数十年後を楽しみにしています（３０歳 / 女性）
●地域の活性化（３２歳 / 女性）
●地域おこし（５０歳 / 女性）
●自然のうちのニンゲンを再び思うきっかけとなること（５５歳 / 男性）
●一過性のものではなく、細く永く続いて欲しい（４５歳 / 女性）
●地域の魅力をどんどん掘り起こして欲しい（４７歳 / 男性）
●よりたくさんの人にこのプロジェクトを知っていただけたらなと思います（１９歳 / 女性）
●地域のおもしろさの再発見（４７歳 / 女性）
●森に関するいろいろなことをおしえてもらいたい（76 歳 / 男性）

その他の感想

●去年西会津のイベントに複数回参加したことで、すっかり西会津ファンになり、facebook で追っかけのように情報を求めています。西会津ギフトを母の日に贈って喜ばれました。その土地がとても好きになるのがこのプロジェクトの産物です（４７歳 / 女性）
●よくわからないプロジェクトでしたが、ぼんやり見えてきました。面白い試み期待してます（４７歳 / 男性）
●アートプロジェクト、フォーラムなど会津の奥というと“ドロ臭い”イメージを持っていましたが、非常に今風のキーワードなのでお年寄り始め、地域の人にどう伝える？伝わる？かがこれから非常に楽しみです。ですが、実際に関わっているであろうお年寄りの姿が見えず、言葉も方言の人はいなく、ちょっと物足りないきもちがあったことも否めません。先入観として、フライヤーのおじいちゃんみたいな方々のお話を伺えると思っておりました（45 歳 / 女性）
●本日となりに座っていた人をはじめ、いろいろな方が会津にいらっしゃることをしれたことが大変ためになりました（５５歳 / 男性）
●このフォーラムにもっと人が集えれば、会津の人に周知してもらえればと思います。福島民報などの新聞社に情報を送って載せてもらってください（50 歳 / 女性）
●民俗学の映像上映会を企画して欲しい（先日、京都龍谷大学にて奥会津の木地師の映像を見て感動しましたので…）（41 歳 / 女性）
●地元の方々の反応ももっと聞きたかったと思います。これからの活動を楽しみにしています（32 歳 / 女性）
●たぶん、今、森に住む人は森を都会にしようと思っていないし、町や都会に住む人はその場所を森にしようと思っていない。森に住む人と、町や都会に住む人、地域の本流は限定的でというか交流の目的が明確にならないと、いい加減な参加者だけに成ると思いました（51 歳 / 男性）
●すぐに見えてこない「やってみないとわからないこと」に光があたって、評価され、地域にそして福島県に、ひいては日本国中に理解されれば、心もあったかく成ると思います。がんばってください（69 歳 / 女性）
●北塩原、猪苗代、磐梯での活動も期待しております（28 歳 / 男性）
●もっと森を活用しなければならないと思った。木を切ったら植林する。森からいろいろな食物を育てる（76 歳 / 男性）

どちらから来られましたか？
会津若松市……６人
喜多方市……７人
郡山市……１人
伊達郡……１人
会津美里町……１人
県外……２人（東京、山形）

性別
男……１０人
女……７人
不明……１人

年齢
１０代……１人
２０代……１人
３０代……２人
４０代……５人
５０代……３人
６０代……１人
７０代……２人
９０代……１人
不　明……２人

情報はどこから？
チラシ……２人
友人・知人・家族……９人
FACEBOOK……４人
公式サイト……１人
その他……３人
（県のイントラネット、
西会津グリーンツーリズムのブログなど）

アンケート
『森のはこ舟フォーラム in 南相馬 ～ つなみがおしえてくれたこと～』

フォーラムの感想
●「森」というテーマに海や水、河川等が加わり、科学的な視点から、今我々がすべきことについて思考するという行為が刺激的でした。森さんの講演がとてもよかった（49 歳・男性）
●大変参考になった（56 歳 / 男性）
●３人の発表者の方、川内村村長のお話、いずれもきわめて示唆に富むお話で多くを学びました（37 歳 / 男性）
●海・山・里が一体となった浜通りの郷土性がどのように成り立ち、どのような価値があるのかを考える機会となりました。震災・原発事故により、自然と人間の関係が破壊されたことをみんなが一人ひとり真剣に再考しなければいけないと思います。アート、そして日常の営みがそれらのきっかけとして機能する可能性を感じます（34 歳 / 男性）
●大きな重要なテーマに取り組んでいただいたと思います（43 歳 / 男性）
●大槌町の事例と対比して、福島あるいは南相馬の現状を知ることができた（45 歳 / 男性）
●復旧・復興が急がされる中で、どうやってふる里を守っていくかその難しさを感じました（57 歳 / 男性）
●とても良かった。このような学びの場、共有の場に続けて参加したいです（女性）
●会津に住んでいると除染の現状を知りませんが、南相馬に向かう道中の風景は刺激的でした。津波の功罪を県民がきちんと考える機会を得られました（37 歳 / 男性）
●勉強になることがたくさんありました（47 歳 / 女性）

今後「はこ舟」に期待すること
●これからも続けていってほしいと思います（47 歳 / 女性）
●アートプロジェクトの意義を多くの人にしっていただけるよう頑張ってください（37 歳 / 男性）
●どんどん広がってもっと知られていくといいなと思います（女性）
●人間と自然の関係性から新しい物語（＝新しい価値観）を生み出す源になってほしい（45 歳 / 男性）
●息長く継続されてください（43 歳 / 男性）
●アートが地域の人同士をつなげ、歴史文化を伝承することだけでなく、そこに生きること、ひとりひとりの人生の豊かさをます媒体になれると確信しています（34 歳 / 男性）
●人と人のつながり、知識の交換、出会い（61 歳 / 男性）
●さらに多くのアーティストの参加を促し、目が開かれるような経験を住民のみなさん、他の土地のみなさんと共有できるような機会としてください（57 歳 / 男性）
●私たちが生きていく上で何が大事かを人々に伝え続けることを期待します（56 歳 / 男性）
●森をフックに多様な専門領域から、人と自然の折り合いの付け方を紐解いていくことを、プロジェクトとして継続して欲しい。フォーラムを受けてのアートプロジェクトとの進展を期待したい（49 歳 / 男性）

その他の感想
●震災後、自分の時間をどのように使っていいのかわからない。自分の計画がなくなり、新たな計画の見直しがこの先である。地盤をこれから築き上げる新たな課題の中、暇な時間をこのフォーラムで埋めてゆく。やることがまだまだあるが、ひとりで進むしかない（61 歳 / 男性）
●津波によって浦が復活した場所が復興工事によって壊されてしまうことが残念に思いました。太宰府での活動も興味深いですね（44 歳）
●自分にできることはなんだろうか、そこをよく考えたいと思います（57 歳 / 男性）
●他のアートプロジェクトを見学に行きましたが、規模が大変大きかったです。費用対効果と言われますが、相応の予算が投下されないと、中途半端になってしまうので、もっと大きな事業になることを祈っています（37 歳 / 男性）
●町長の話を聞いてからのクロストークができなかったのは残念でした（49 歳 / 男性）

どちらから来られましたか？
南相馬市……4 人
相馬市……2 人
新地町……1 人
会津若松市……1 人
喜多方市……1 人
郡山市……1 人
県外……4 人（東京、宮城）

性別
男……28 人
女……14 人

年齢
３０代……2 人
４０代……6 人
５０代……3 人
６０代……1 人
不　明……1 人

情報はどこから？
チラシ……5 人
友人・知人・家族……8 人
不明……1 人

アンケート
『森のはこ舟セミナー＠西会津「伝統野菜」』

セミナーの感想
●映画を見て、監督・出演者の声が聞けて、貴重な時間でした（女性）
●「間に合う」可能性があることに希望の光がみえた。映画の後の赤坂先生の言葉、胸に響きました（女性）
●伝統野菜の活性化の成功例をみることができた。自分の活動に重ねて考察を深めることができた（３７歳 / 男性）
●福祉に携わる視点から、人の多様性・多用な価値観ということを考えてきたが、今回のセミナーでその根っこの部分を再認識させていただいた（４１歳 / 男性）
●野菜及び食物の新しい価値を見出しました（４８歳 / 男性）
●「歴史や文化を守ることにまだ間に合う」地域の歴史や文化の保存をするに後押しを感じた（５３歳 / 男性）
●伝統野菜は単なる作物・食材ではなく、その土地の気候風土や人々のに深く根ざした文化そのものなのだと感じました（男性）
●それぞれの地域の違いがあっておもしろい（３２歳 / 男性）
●野菜という生きた文化財にいかに価値を見出していくのか、といった点で面白いと感じました（２４歳 / 男性）
●映画がおもしろかった（２５歳 / 女性）
●伝統野菜を通じて、その土地の文化や人々の思い、地域のプライド、物語の意義、深さについて改めて考えることができました（３４歳 / 男性）
●西会津版の映画を作ってください（４２歳 / 男性）
●多くの共感を得ました。直前まで昭和村でフィールドワークをしていたのですが、そこで感じたことを再確認できるような気持ちになりました（４４歳 / 男性）
●農業に限らず、地域のために成る話だった（３６歳 / 男性）
●スーパーに会津野菜を並べ、名を売るのがすべてではないという赤坂さんの言葉は胸に響くものがあった（３１歳 / 男性）
●文化としての伝統野菜がよくわかった…種や技術など（61 歳 / 男性）
●とても興味深く面白かったです（４７歳 / 男性）

セミナーで取り上げて欲しいテーマ
●民間療法、森の信仰、タブー、動物たちの付き合い（４７歳 / 男性）
●地域の自然、歴史に根ざしたもの（６１歳・男性）
●効率化やその他の事情により失われたもの、失われつつあるものを残し、つなげていくようなもの（３１歳 / 男性）
●地球温暖化対策への取り組みやオーガニックトレーサビリティ（３６歳 / 男性）
●からむし、麻、自然布（４４歳 / 男性）
●森の音、夜の森の中で聞ける幻想的な空間との出会い、神秘的な時間なんか面白いと思います（４２歳 / 男性）
●一時間で作れる木の家、的なミニマムな暮らしについて（２５歳 / 女性）
●再生可能エネルギー（２４歳 / 男性）
●映画の中では、山形の伝統野菜と焼き畑及び林業とが密接な関係である図が示されていましたが、地元の会津地域ではどのようなあり方だったのか、知りたいと思いました（男性）
●森のガストロノミー（食と文化の考察）（４８歳 / 男性）
●森と水。会津の津は水の集まりとのことなので（４１歳 / 男性）
●森にまつわるくらしの技術（３７歳 / 男性）

今後「はこ舟」に期待すること
●新しい森との暮らしが開拓される（３７歳 / 男性）
●人と人、人と自然を繋ぐこと（４１歳 / 男性）
●一個の行事から地域づくりにつながること（５３歳 / 男性）
●地域の自立のために、必要なことをセミナーでたくさん行っていただきたい（２４歳 / 男性）
●温故知新を体験し、後世へ伝え、自然を娃しいと感じることができるプログラムを期待します（４２歳 / 男性）
●バラバラに活動している人達同士をつなぐこと（４４歳 / 男性）
●一部の関係者だけでなく、一般の人が訪れやすいプロジェクトに（３６歳 / 男性）
●もっと多くの人にしってもらえるよう、がんばってほしい（３１歳 / 男性）
●地域の文化を根付かせる、文化人がいっぱいいる地域にする（６１歳 / 男性）
●何が大事なのか、何を残していくのか、関係者のしっかりしたメッセージを発信して欲しい（４７歳 / 男性）

その他の感想
●佐々木長生さんのお話をもっときいてみたいです。西会津の地元の方も呼んで、勉強会ができればと思います（女性）
●関係者のマスターベーションにならず、広く一般市民が参加出来る形に。内容、アナウンスの見直し（４７歳 / 男性）

どちらから来られましたか？
西会津町内……7 人
会津若松市……3 人
喜多方市……1 人
猪苗代町……1 人
福島市……1 人
県外……3 人（東京、愛知、新潟）

性別
男……13 人
女…… 3 人

年齢
２０代……2 人
３０代……4 人
４０代……5 人
５０代……1 人
６０代……1 人
不　明……3 人

情報はどこから？
チラシ……4 人
友人・知人・家族……6 人
FACEBOOK……5 人
その他……1 人

アンケート
『森のはこ舟セミナー＠喜多方「漆」』

セミナーの感想
●職人の話は興味深くたのしかったです（３９歳 / 男性）
●非常に面白かった。輪島に住んでいるが、同じ問題を共有していると思った（４９歳 / 男性）
●とても勉強させて頂きました（５９歳 / 男性）
●漆の奥深さが理解できた（６０歳 / 男性）
●秋葉山の話が圧倒的に面白かった。もっとききたい（２５歳 / 男性）
●会津の漆の現状を理解することができた。大変貴重な時間でした（３１歳 / 男性）
●漆の話はとても深く楽しく聴くことができました。もっと聞きたいです（７２歳 / 女性）
●漆に関わる人の熱意が感じられ、すばらしいセミナーでした（７８歳 / 女性）
●大変おもしろくためになりました（男性）
●学ぶことが多かった（女性）
●大変おもしろかったです。「職人」の話はすごいです（６１歳 / 男性）
●ビデオがおもしろかった。とても共感できる面白いお話でした。漆の良さ人から人へじわじわ広がっていくといくといいなと思いました（２４歳 / 女性）
●漆器の良さというのが、眼に見えない部分もある。その部分も今回のセミナーで知ることができた（２５歳 / 男性）
●現状のいろいろなお話が聞けて勉強になった（４２歳 / 女性）
●楽しいお話でした（３５歳 / 男性）
●地域の宝がわかってよかった（４４歳 / 男性）
●話し手の人選がよかった。なかなかこの組み合わせで話を聞けることは無いと思うので（４６歳 / 男性）

セミナーで取り上げて欲しいテーマ
●森林のこと（４４歳 / 男性）
●また、漆についてお願いします（３５歳 / 男性）
●生地そのもの。漆の次回も聞いてみたい（４２歳 / 女性）
●今日のように職人さんの話を聞きたい（７８歳 / 女性）
●里山（６０歳 / 男性）
●道具・鍛冶（４９歳 / 男性）
●会津農書、会津木綿、会津歴（３９歳 / 男性）

今後「はこ舟」に期待すること
●次世代につなぐこと（３９歳 / 男性）
●森林文化の普及（４４歳 / 男性）

どちらから来られましたか？
喜多方市内……7 人
会津若松市……4 人
福島市……2 人
会津美里町……1 人
西会津……1 人
県外……3 人（東京、千葉、石川）

性別
男……39 人
女……14 人

年齢
２０代……3 人
３０代……4 人
４０代……3 人
５０代……1 人
６０代……2 人
７０代……3 人
不　明……2 人

情報はどこから？
チラシ……5 人
友人・知人・家族……8 人
FACEBOOK……5 人

アンケート
『森のはこ舟セミナー＠三島「狩猟」』

セミナーの感想
●素晴らしかったです。また自由にがんばってください（３４歳 / 男性）
●大変充実していた（３０歳 / 男性）
●とてもおもしろかったです。筈家さんの生の声、とてもためになりました（３３歳 / 女性）
●文化やもっと縄文から連なる話が興味深かったです（３９歳 / 男性）
●初めてマタギの話を聞きました。知らない世界のことでしたので、大変おもしろく拝聴いたしました（３４歳 / 女性）
●山のことについて、面白い話を聞かせて頂きました（３５歳 / 男性）
●猟師の方の山の知識、山の草やきのこなどの知識が豊富で、普段聞けない話をきけておもしろかった（３３歳 / 男性）
●興味深いお話をたくさんお聞きすることができ、貴重な経験をすることができました。ありがとうございました（５３歳 / 男性）
●狩猟の変化が森の生態系に大きな影響を及ぼしていることに驚きを感じました（５９歳 / 男性）
●良かった（５３歳 / 男性）
●３人のトーク時間が長く、とても興味深くお聞きしました。田附氏の写真の目線素敵です（５４歳 / 女性）
●写真と実体験に基づいたお話、わかりやすくとてもおもしろかった（４４歳 / 女性）

セミナーで取り上げて欲しいテーマ
●生物多様性（３３歳 / 女性）
●麻・綿・衣の文化（３９歳 / 男性）
●本当の豊かさやこれからの社会について（４７歳 / 女性）
●ワークショップ的なものがあればより楽しいと思います（３０歳 / 男性）
●森の四季について（３５歳 / 男性）

今後「はこ舟」に期待すること
●森を維持する方法について（３５歳 / 男性）
●森林文化の普及（４４歳 / 男性）
●子供たちに聞かせたい（３０歳 / 男性）
●自然と遠に生きる大切さがみんなに伝わればいいと思う（４７歳 / 女性）

どちらから来られましたか？
三島町内……1 人
会津若松市……3 人
福島市……1 人
喜多方市……1 人
西会津……1 人
郡山市……1 人
県外……7 人（東京、神奈川）
その他……3 人（フィンランド）

性別
男……20 人
女……11 人

年齢
３０代……7 人
４０代……4 人
５０代……5 人
不　明……1 人

情報はどこから？
チラシ……6 人
友人・知人・家族……3 人
FACEBOOK……3 人
その他……5 人
（会社の広報で）

アンケート
『幻のレストラン　～海と山の結婚式～』

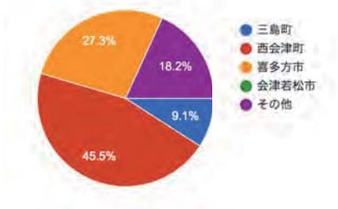
【メンバー用アンケート】
なぜプロジェクトに参加しようと思いましたか？
●歴史や文化を学べるとともに、行政区を超えたコミュニティが構築できると感じたから。
●町と町をつなぐ街道から、歴史を知り、食文化を捉え直す試みが興味深いと感じました。また「幻のレストラン」というアウトプットの方法も面白そうだと感じ参加しました。
●会津に住んでいる若い人たちと一緒になって、楽しくて地域を盛り上げられる何かをしたかったのと、会津で活動している人たちと繋がりたかったから。
●会津に移住したばかりだったので、もっと会津の事が知りたかったのと、色んな人と会ってみたかったので参加しました。

本プロジェクトに参加したご感想をお書きください。
●古きをたずねて新しきを知る、を実感しました。
●郷土食の調査先で聞いた、食だけでなくその地域にまつわる歴史や人々の生活などの話は新鮮でした。 幻のレストラン当日は出席者の方々に喜んでいただき、料理を運ぶのが楽しかったです。
●地域の人たちが、それまで当たり前だったもの（道や伝統食、文化）から新しく“気づき”を得て、何か誇りのようなものを持てたのではないかと感じました。いろいろな人や場所を訪ね歩くリサーチもRPGのようで楽しかったです。
●なにかを一生懸命表現しようとすれば、なんでも伝わるんだなと驚きました。eat art & taro さんの「アートがきっかけで何かが始まれば。アートの役割ってそんなものでも良いと思う」という言葉も自分にとっては大きな収穫でした。
●フィールドワークやミーティングを通して、地域を理解する手段はたくさんあって、いろんな角度から見ればそれだけたくさんの人と関われるし巻き込めるんだということを教わりました。

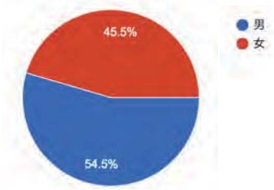
【招待客用アンケート】
今回の「幻のレストラン～海と山の結婚式～」へ出席されたご感想をお書きください。
●ひとつひとつ料理の背景を丁寧に説明し、徐々に豪華になっていく演出は素晴らしい。 ファーストフードに席巻されている世の中にあって、地域固有の価値を見直した究極のスローフードであると感じた。
●地元の食材（資源）は、地域の財産であり宝です。 これを現代風にアレンジして、調理しまた街道と食文化を見直して、交流を促進する契機（きっかけ）となったことと思います。
●想像以上のイベントで驚きました。 会場設営、運営、料理とも満足！！一時、別の空間にいるようで感激しました。 昔と今を食で結びつけたアイディアは良かったし、改めて地域の素晴らしさを感じました。

感想、意見
●今回の「結婚式」は食材の出会いという意味とともに、新しいライフスタイルの出発ともいえる。 また、このようなスタイルを求めている方は数多くいる。 今回の出会いと出発を大切にして、１年、３年、１０年と息の長い取り組みとなりさらに進化していくことを期待しています。
●私たちの町には歴史、文化、食、人etc…宝がたくさんあると思います。それを伝え、新しく発展させていくことが人を動かし、地域を活性化させていくことだと思っています。

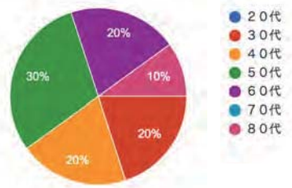
どちらから来られましたか？



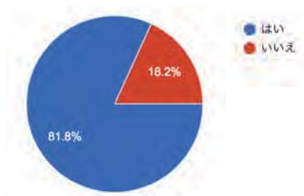
性別



年齢



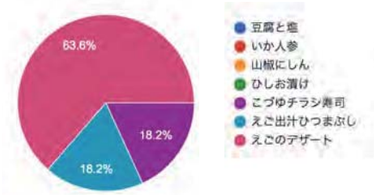
今回のイベントのご参加以前に、森のはこ舟アートプロジェクトについて、ご存知でしたか？



お召し上がりになった料理で、最も美味しかったものを一つお選びください。



お召し上がりになった料理で、最も印象に残ったものを一つお選びください。



『森光水 ~ Natural Energy Valley MISHIMA ~』

筑波大学 創造的復興プログラム ハイブリッドアート演習授業
履修学生の作品コンセプト及び感想コメント

グループ名：鬼灯チーム

宮澤 響　情報学群 情報メディア創成学類２年
私は鬼灯班の一員として、【囲】、【集】の二作品の制作に携わりました。この活動を通して、芸術作品を制作することの難しさ、人や町の温かさ、そして作品が点灯した時の感動を味わうことができました。このような素晴らしい経験をさせてくださった村上先生 、逢坂先生、TA の石田さん、別城さん、同じ鬼灯班として活動した素和さん、実優さん、らっしーさん、時には互いに協力し合った他班の皆さん、そして、何から何までお力添えをいただいた三島町の皆様、本当にありがとうございました。

李 素和　芸術専門学群３年
作品の制作は日々試行錯誤の連続でした。でもそれらを乗り越え、一面の雪原の中で作品たちがライトアップされた時には、その幻想的な光景に胸がいっぱいになり、この活動に参加できた事を心から嬉しく思いました。三島町に訪れ、現地の方の温もりに触れ、共に大きなプロジェクトを成し遂げたことは、地域の活性化に貢献したいという目的以上に得難い体験でした。共に活動したメンバーと、お世話になった全ての皆様に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

鈴木 実優　芸術専門学群３年
私たちのチームは、三島町の伝統工芸である編み細工のマタタビのツルを提供していただいたり、展示場所として小屋を貸していただいたりと、たくさんご協力によってかたちになりました。何もかも初めての展示で不安になることも多くありましたが、最後には川井地区でしかできない展示ができてとても良い結果になったと感じております。また、困難な制作だからこそ今までの自分自身の制作に対する姿勢を見直す機会にもなりました。か
けがえのない経験をさせて頂き、関わった全ての皆様に感謝いたします。

五十嵐 理乃　芸術専門学群３年
私達の作品のメインテーマは「自然の灯り」です。美しい自然と共に生きる三島町に、自然から得られるエネルギーを用いて明かりを灯すと、自然の灯火・鬼灯をモチーフにした作品があたたかな鼓動を刻み始めます。編み細工素材をご提供いただいたり、設置の際に助けていただいたりと、三島の皆様には感謝してもしきれないほどお世話になりました。三島町の皆様の優しさを目一杯に受け止めて生まれたこの灯が、今度は皆様の心を優しく包み込めると幸いです。

グループ名：ブラックライトチーム

三枝 陽介　情報学群 情報メディア創成学類２年
10 月に初めて三島町に訪れた時、豊かな自然を感じるとともに、編み組み細工という伝統工芸品に触れ、この素材を活かしてライトアートをつくる試みが始まりました。当日までの制作ももちろんですが、なにより現地での設営作業が印象的です。現地の方々の協力を得て、骨組みだけだったビニールハウスを幻想的な一室に仕上げることができました。地域の方々の温かみに触れることができたこの制作は忘れることができません。

田綿 遥妃　情報学群 情報メディア創成学類２年
私はブラックライトで作品をつくる班でした。私は雪かきもまともにしたことがなかったので、雪の多い場所でする設置にかなり不安を抱えていました。シートはきちんと張れるか、ライトの光がビニールハウス全体に渡ってくれるか、どのくらい時間がかかるのか…しかし、三島町の方々がもの凄く熱心に手伝ってくださり、思った以上に幻想的で素敵な作品ができました。この授業で、三島町と関わりを持てたことをとても嬉しく思います。

吉村 勇紀　芸術専門学群３年
町にめぐる水路の心地よい水の音、立派な蔵などの風情ある建物、そして何より現地の方々の穏やかで楽しそうな雰囲気を感じ、初めて訪れた時から三島町はとても魅力的なところでした。今回作品を制作する過程でも三島町の方々のたくさんのご好意に触れ、地域の活性化というよりこちらが元気をいただいたという思いでいっぱいです。終始慣れない雪の中での作業でしたが、この素敵な地域で活動できて、とても楽しかったです。

Fokker Richard　芸術専門学群 留学生
As an exchange student from Holland this project was an real inspiration and a good opportunity to visit the beautifull county sideof Japan. I really admire all the effords the student make to flourish this village and make beautifull art installations. I was very sad ihad to return before the final installation was finished but very happy to see all the beautifull pictures. Thank you all for theexperience, i really liked it!

グループ名：細木チーム

山本 耕嗣　情報学群 情報メディア創成学類２年
一言で言うとプロジェクト全体を通じて出会いの連続だったなと感じています。チームの人たちとは作品テーマをどのように表現していくのかについて何度も議論や実験を繰り返し、また地区の方々にはテーマの決定から設置までずっとお世話になりつづけました。これらがあってこそ僕達の作品が出来上がったのだと思います。僕は芸術を専門に学んでいるわけではありませんが、今回の経験はきっとこれからの人生の糧になると思っています。

石川 夏樹　情報学群 情報メディア創成学類２年
先生がたや TA のお二人や地域の方々に助けていただきながらグループの仲間たちと協力して何度も試行錯誤を繰り返して準備をし、慣れない雪原での作業を経て完成したものなので、その分感動はいままでに経験したことのないものでした。わたしたちの作品は河合地区の生活に溶け込んだ風景を表現しました。そのために蔵や細木を実際に貸していただいたりして、地域の方の温かさを強く感じました。今回の授業で河合地区に展示ができたことをとても嬉しく思います。

沼田 拓也　情報学群 情報メディア創成学類２年
作品を制作し、実際に展示するという初めての経験に、期待とともに不安を感じつつの作業でした。慣れない雪の中での作業に苦戦しつつ、地域の方々の力を借りながらなんとか思い描いていた形にすることができました。この授業を通して自分は、普段の生活の中では感じることのできない人と人とのつながりや温かみ、そして、一つのものを作り上げる達成感と難しさを実感することができました。作品をご覧になった方に、少しでもこの地域の魅力が伝われば嬉しいです。

白石 珠奈子　芸術専門学群３年
わたしたちの作品は、角田さん夫妻との出会いが無ければつくることはできませんでした。初対面でありながら家族のことやかわいのことについて話してくださったり、甘酒や揚げ饅頭を振舞って頂いたりとかわいの温かさを体感させていただきました。知らない土地で初めて会った方々と作品をつくる経験が初めてだったため班のメンバーや地元の方々との関わりや試行錯誤はとても貴重な体験となりました。またかわいの方々に会いに行きたいです。

町長 しおり　芸術専門学群３年
全く知らない土地からインスピレーションを受けて作品を作り、それを限られた時間で設置するという体験は後にも先にもなかなかできない貴重なものだと思います。また、芸術専門学群以外の考えやアイデアを取り入れたり、現地の方々との会話の中から作品作りのヒントを得たりと、人との交流も重要なきっかけになった授業でした。私たちの作品は先生方のアドバイスや現地の方々の協力なしでは成し遂げられなかった作品でした。本当にありがとうございました！

石山 望　芸術専門学群３年
このプロジェクトは、水力発電とライトアートの融合ということだけでなく、現地の方がお持ちのものが作品と融合するということもまさしくハイブリッドであると感じました。
特に組み上げた細木が作品そのものの一部となっている「かわいのすがた１」はその最たるものだと思います。細木の作品には途中から参加という形になりましたが、角田さんのお宅の細木の伝承というバックグラウンドも含めてとても良い作品に関われたことを嬉しく思っています。

グループ名：春待ちチーム

佐山 円未　芸術専門学群３年
はじめて川井地区を視察に行った時から、この大自然にそっと寄り添えるような作品を作りたいと思った。ライトアートの作品を制作した経験はなかったが、自分の中で光を命や温かみと言った表現として消化することができた。挑戦的な試みが多く力不足な面も感じたが、グループのメンバーと共にやり遂げることができて本当に良かった。

市川 由佳　芸術専門学群３年
秋に初めて三島町を訪れた時、私はその地域の温もりに感動しました。蔵や棚池、昔ながらの造りの家、畑や植物といった風景から感じる力強さ、三島町に暮らす方々の優しさやパワーを、冬の寒さの中でも感じられるようにしたいという思いで作品を制作しました。今回そういった温もりに出会えたこと、展示の機会をいただけたことに感謝しています、ありがとうございました。

勝部 里菜　芸術専門学群３年
振り返ってみると、コンセプトについて揉めたり、アウトプットについて揉めたり、制作する中で揉めたり…(笑) と正直大変ではありました。しかし、チーム全員が共通していたのは良い作品を作りたいという強い気持ちでした。この気持ちがあったからこそ、議論を重ね、最終的には良い作品ができたと思っています。もちろん、うまくいかなかったことや、反省点は多くあります。この経験を今後の制作活動に生かしていきたいです。最後に、三島町の皆さん、先生方、チームのみんな、春待ちチームの作品に関わってくださったすべてのみなさまに感謝。

Li Lina　芸術専門学群　留学生
I am glad that I took this course. Even now, I still have a clear image of how beautiful Mishima was. I sadly regret that I couldn't go the last time in February. To see the result of the project which we worked so hard on, seems like a dream coming true. Thank you all for making this a good memory for me!
ありがとうございました！

『森光水 ~ Natural Energy Valley MISHIMA ~』
筑波大学 創造的復興プログラム ハイブリッドアート演習授業
履修学生の作品コンセプト及び感想コメント

アンケート
『写真展「森を感じる ~ 写真家・林明輝が訪ねた日本の森 ~」』

どちらから来られましたか？

【村内】……15人

【県内】		【県外】	
郡山市……	12人	新潟……	1人
会津若松市…	24人	東京都……	2人
喜多方市……	12人	山形……	1人
県内……	3人	茨城……	1人
川俣町……	1人	神奈川……	2人
福島市……	9人		

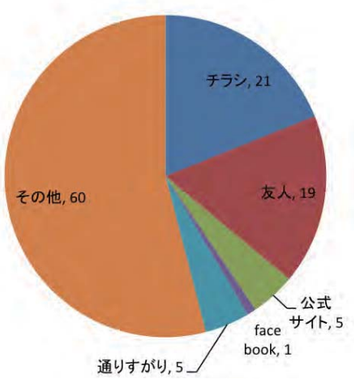
男性

10歳未満	0
20歳代～	0
30歳代～	0
40歳代～	6
50歳代～	9
60歳代～	19
70歳代～	24
80歳代～	2

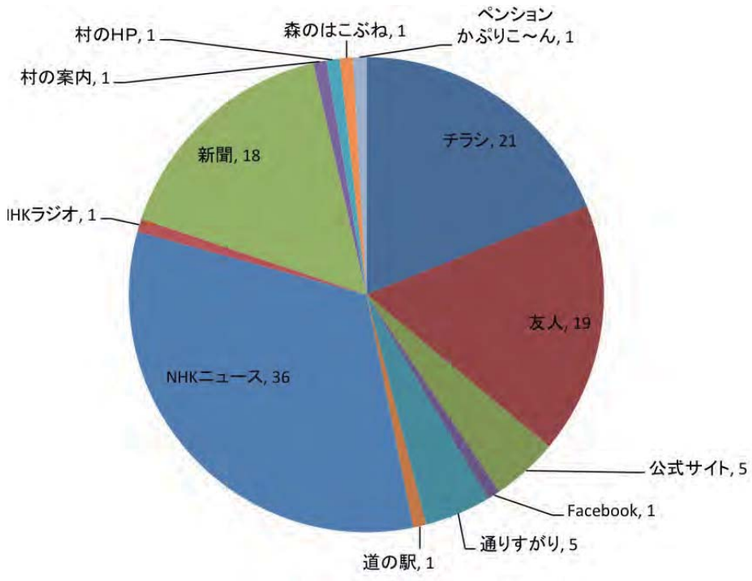
女性

10歳未満	2
20歳代～	2
30歳代～	0
40歳代～	1
50歳代～	11
60歳代～	17
70歳代～	11
80歳代～	2

情報はどこから得ましたか？



「その他」の詳細



写真展の感想

●行ったことのある山などちらほらあって良かった。発光するツキヨダケや海ホタルなど、すごくドラマチックな写真だなあと感動しました
●豊かな自然を守らなければならないと感じました
●写真を撮るのが楽しみですので感動します。このような写真を撮ってみたいです
●私どもの森を再発見したような写真展でした
●自分の目では写真の様な風景が入ってこない
●林明輝さんの写真に対する情熱が感じられました
●自然の色々な姿・色彩に感激しました。思い切って出かけてきて良かったです
●素晴らしい。水墨画を描いていますが、写真家の構図の取り方（アングル）の取り方にはその的確さに敬服するばかりです
●ありがとうございました。神さまの目線で森を見るとこんなでしょうか？と思わせる気高い画面に嬉しさがこみあげて来ました。
●色の美しさに感動しました。自分では行けない日本の風景を見てつくづく四季の素晴らしさを思う
●森をたしかに感じました。日本全国の色々なところが写真で見れて良かった。さすが写真家さん、ポイントが違うし大変良かった
●日本には様々な自然が残っていると感じた
●私も風景写真を撮って30年になりますが、日本中を撮れる事にうらやましく思いました。
●自然の写真はとても素晴らしかったです。もう少し福島県内の写真が多くても良かったのかと思います。
●コントラストを強調しすぎている作品が有った
●なかなか見れない全国各地の写真を一同に見られて良かった
●この施設の雰囲気に写真がぴったりで大感激でした
●日本国中ありこちの景色が見られて良かった
●最初の室をみて、もう終わりかと思ったら、次から次へと森の写真があり、その見事さに感動しました。私は只見町出身で、父より昔のぶなの話をよくきかされていたが、立派な姿にありがたく嬉しくなりました。福島の写真がもっともっと多いことを祈ります。
●森の美しさ、自然のきびしい中でのさつえい、かんげきしました。まさに森は生きていて、これからの人生に力をもらいました。
●未知の世界にいざなわれました。
●ここに暮らしていない人からみると森は暗い印象なのかなと思いました。神秘的なだけでなく、恵みの森であることも教えてくれる写真が欲しいですね。
●すばらしい。自然のありのままの中に存在する美をとりあげて芸術の域にしている。大切な森をいとおしく思った。
●どの作品もとても素晴らしく感動しました。自然の風景を撮ると言う事は絶対同じものは無いと考えます。その人々の考えで焦点を絞り撮っているからこそ優れた作品になっているのでしょうね
●撮影地及び撮影データの記載があり、参考になった。
●日本の自然のすばらしさ、見過してしまいまそうな場面をしっかりうけとめているのがすごいです
●古里を感じ生の原点をも訴えかけている様です
●自然を切りとるすばらしさを感じます
●森の美を多彩な角度からの撮影で驚いた
●ホタル、光るキノコ、海ホタルなど宇宙を思わせる風景にはっとさせられました。また、水が見せる一瞬の表情に心をうばわれる思いがしました。
●せまい日本　すばらしいものがまだまだありますネ

今後「はこ舟」に期待すること

●自然への開眼
●今回、たまたま三島でチラシで情報を知ることができたが、もっとピーアールが必要ではないでしょうか
●森を大切にすることを多くの人々にも期待したいです
●赤坂先生が委員長をされていることでよりいっそう東北に光があびていくことを期待しています
●いま、森・山がないがしろにされています。森・山のすばらしさを再認識させるうごきのはじまりを感じました
●忘れてはいけない（けど、ほとんど忘れられた）生命と自然の、生活の関わりに気づかせてください。
●もっと各地で開催して欲しい
●日本の豊かな自然がいつまでも残るようなことをしてほしいです
●子供達に森・自然のすばらしさを教える時間をとってほしい。点数で評価することのみが学校ではないということを…
●豊かな自然を発信する、写真展や絵画展などその他、屋外のアート作品展もおもしろそうです
●会津では見れないものが見てみたい
●森の大切さを多面的に分かりやすく広めて下さい。
●人間の暮らしや地球にとっての森の重要性を県民が理解するとともに国内外に伝える役割をしていただけるとよいと思います。
●「森のはこぶねアートプロジェクト」が抽象的でわかりづらい。主旨は良いのだろうが、今のままでは一般的にわかってもらえないのでは？
●写真の構図の取り方
●人間と自然の関係がより良いものになるきっかけをこれからもたくさん作っていって欲しいと思います。
●自然保護